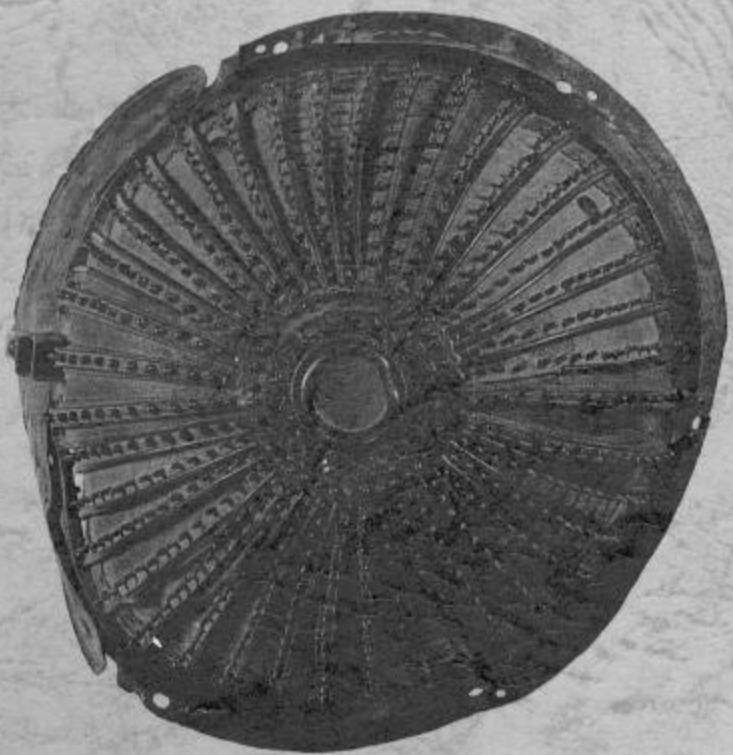
宇都宮の
金属工芸



宇都宮市教育委員会

表　紙

重要美術品

『三十八間星兜（さんじゅうはちけんほしかぶと）』

（昭和９年９月１日認定）

宇都宮市馬場通り１丁目１番１号

宇都宮二荒山神社　所　蔵

文化財シリーズ第12号

宇都宮の
金属工芸

屋外の物件を主として

平成５年

宇都宮市教育委員会

序　　文

文化財シリーズ第12号として発刊いたしますのは、身近な社寺堂宇で見かける鉄や青銅製など工芸品を扱った「宇都宮の金属工芸」です。

鉄や青銅などの金属の工芸品は弥生時代の初期頃日本に上陸し、急速に全国に広まっていったといわれています。宇都宮市近辺では古墳時代の前期である4世紀ころの古墳から鉄器や青銅器が出土しており、当時すでに宇都宮の地にもこれらの金属工芸品があったことがわかっています。

鉄や青銅が生活の中に入る前は、主に木や石を用いていました。木や石に比べて金属は固くかつ長持ちし、今まで得られなかった鋭利な刃物が作れるなど、大変に多くの長所を挙げることができます。しかし、青銅や鉄を作ったり加工するためには高度な技術を必要としたために、特定の人々が少量の生産をつかさどっていたと考えられています。それ故に金属の製品には、単に便利であるという面のみでなく、権力や宗教の象徴のような面も多くあったようです。当時の首長の墓である古墳に副葬品として鏡や武具、農具などの金属の工芸品が埋められているのは、このような理由であったと考えられています。

後に技術が発達し、金属の製品が私たちの暮らしの中に普及しても、私たちは金属の製品に何らかの畏敬の念を持ち続けたのではないでしょうか。それらが、信仰の面に現れ、奉納という形で現在の私たちに伝えられているのです。

今回の報告書では、どなたでも比較的簡単に見学できるものを中心にまとめてみました。皆様方の身近な所にも多くの金属工芸品がありますので、地元を見直す契機にし、郷土を愛する心を養っていただけますよう、心から願う次第です。

最後になりましたが、今回の調査及び本冊子の刊行にあたり御協力いただきました宇都宮市文化財調査員の方々、また調査の際にお世話になりました多くの方々に、心から感謝の意を表します。

平成5年3月

宇都宮市教育委員会

教育長　藤　田　昌　平

目　　次

序　文

まえがき

Ⅰ　『宇都宮の金属工芸』の調査について …… 1

Ⅱ　『宇都宮の金属工芸』

所在分布図 …… 3

1　国指定重要文化財

(1)　鉄塔婆　大通り５丁目 …… 8

2　国認定重要美術品

(1)　三十八間星兜　馬場通り１丁目 …… 9

(2)　鉄製狛犬　馬場通り１丁目 …… 10

3　栃木県指定文化財

(1)　兜　東峰町 …… 11

(2)　鉄錆地六十間筋兜　東峰町 …… 12

(3)　銅鐘　大谷町 …… 13

4　宇都宮市指定文化財

(1)　銅造宝篋印塔　上桑島町 …… 14

(2)　銅鐘　竹下町 …… 15

(3)　二荒山神社本殿勾欄擬宝珠　馬場通り１丁目 …… 16

(4)　篠井神祠　篠井町 …… 17

(5)　銅鐘（およりの鐘）　大通り４丁目 …… 18

(6)　銅鐘　塙田１丁目 …… 19

(7)　銅鐘　大通り５丁目 …… 20

(8)　銅灯籠　大谷町 …… 21

5　未指定文化財
(1)　鰐口 …… 22
(2)　鈴 …… 32
(3)　宝剣 …… 34
(4)　鉦 …… 36
(5)　竜辰 …… 38
(6)　半鐘 …… 39
(7)　鳥居 …… 40
(8)　供養塔 …… 40
(9)　手水鉢 …… 41
(10)　絵馬 …… 42
(11)　露盤宝珠 …… 42
(12)　天水槽 …… 43
(13)　金灯籠 …… 43
6　消防関係半鐘 …… 44

Ⅲ　参考資料
1　金属工芸品所在一覧 …… 65
(1)　国指定重要文化財 …… 65
(2)　国認定重要美術品 …… 65
(3)　栃木県指定文化財 …… 65
(4)　宇都宮市指定文化財 …… 65
(5)　未指定文化財 …… 65
(6)　消防関係半鐘 …… 67
2　宇都宮藩御用鋳物師戸室氏について …… 70
(1)　『鋳物師戸室氏一門とその遺作について』から（冨　祐次氏著） …… 70
(2)　『金工品調査雑考』から（渡辺龍瑞氏著） …… 72
(3)　『天明鋳物資料集　天明鋳工作品各国別（乾坤）』から（佐野青年会議所） …… 74
(4)　北口英雄栃木県立美術館副館長の調査から …… 78

あとがき

ま　え　が　き

本冊子は、昭和63年に宇都宮市教育委員会が、市文化財保護審議委員会の答申を受け、市文化財調査員活動の一環として実施した「金属工芸品調査」の結果をもとにまとめたものです。

同調査は市内全域を対象として実施され、国、県、市で指定されているものを除いて156件の報告がありました。本冊子はこれに事務局（市教委文化課）の職員が調査したものも加え、128件に整理して掲載いたしました。

本冊子は、多くの方々に身近な金属工芸品を紹介することを第一の目的に編集いたしました。ですから専門的な記述は極力避けるようにいたしました。

なお、この「金属工芸品調査」は以下の組織で調査をしましたが、現地調査において多くの方々の御協力を仰ぎました。特に、調査票の分類・整理から執筆・編集は文化財研究展示室の高野左千流嘱託員が担当いたしました。また、巻末の戸室鋳物師関係の資料につきましては、栃木県立美術館の北口英雄副館長、佐野市郷土博物館、佐野市青年会議所、下野史談会、渡辺龍瑞氏ら多くの方々の御協力を賜りました。心から御礼を申し上げます。

●宇都宮市文化財保護審議委員会委員

雨宮義人（委員長）	岩崎良能（副委員長）	大金宣亮（委員）
小林幹夫（委員）	戸田博巨（委員）4.9退任	冨　祐次（委員）
橋本澄朗（委員）	塙　静夫（委員）	森谷　憲（委員）
渡辺安友（委員）	柏村祐司（委員）4.10新任	

●宇都宮市文化財調査員【（　）内は調査員の担当地区】

河合芳幸（一条）	塚田宗雄（陽北）	酒井光一（旭）
綿面昭男（陽南→姿川）	石川秀男（陽西）	高藤常松（星が丘）
松本文一郎（陽東）4.9退任	小林哲夫（泉が丘）	粂川弘明（宮の原）
菊池正仁（平石）	坂本恒一郎（清原）	石川純雄（横川）
坂寄悦男（瑞穂野）	平塚良雄（豊郷）	小塚　博（国本）
高山伝治（城山）	福田　操（富屋）	阿久津義正（篠井）
松本笑悦（姿川）4.9退任	小島豪市郎（雀宮）	安野弥一郎（陽南）4.10新任
清水　昭（陽東）4.10新任		

●宇都宮市教育委員会文化課職員

安達光政（文化課長）	○定岡明義（文化財保護係長）	○手塚英男（同係指導主事）
梁木　誠（同係指導主事）	○小松俊雄（同係指導主事）	大塚雅之（同係指導主事）
神野安伸（同係指導主事）	今平利幸（同係指導主事）	◎高野左千流（嘱託）
小林祐子（嘱託）	間彦克子（嘱託）	○印＝企画編集（◎印＝主任）

Ⅰ　『宇都宮の金属工芸』の調査について

本冊子は、宇都宮市文化財調査員活動の一環として実施した「昭和63年度課題別一斉調査」のテーマ『宇都宮の金属工芸品』及び平成2年度に追加調査を実施した『金属工芸品追加調査(半鐘調査)』の結果をまとめたものです。

1　目　的

金属工芸品は、身近な神社などに数多く伝承されてきたものですが、近年ではこれらを取り巻く環境は決して良いものではありません。そこでこれらの実情を把握し、必要に応じその保全を図ると共に、多くの方々に地元を見直し、郷土愛を育む契機にしていただきたいと考え、比較的容易に見学できる物件を主にして調査を行いました。

2　調査対象

『金属工芸』の調査対象は以下の基準を設けて行いました。

・神社、寺院、堂宇、個人宅、道端などにあるもので、容易に見学できるもの。(屋外中心)

・第二次世界大戦以前に製作、奉納されたもの。

なお以下のものは、今回の調査の対象からはずさせていただきました。

・刀剣、槍など個人で所有している工芸品で、美術品的傾向の強いもの。

・仏像等の信仰の対象物。

・破損が甚だしいもの。

昭和63年度調査票（金属工芸品）

No.

調査日	昭和　年　月　日(　)
調査者	

調査場所	宇都宮市　町 丁目　番　号
所有者および管理者	住所　宇都宮市 氏名 (社寺堂名も)　職業(　)
工芸品の種類	
保存状況	ア、良好　イ、普通　ウ、不良　エ、破損　特記事項
工芸品にまつわる言い伝え・いわれなど	
銘文その他	

調査地略図	工芸品の略図・写真等（寸法および部分名称等）

『宇都宮の金属工芸品』調査票

3　調査方法

(1)　調査

調査は直接現地に行って聞き取り調査を中心にして行いました。なおそれと並行して写真撮影やスケッチ、計測

なども行いました。

(2) まとめ

「金属工芸品調査票」に調査結果を記録し、写真やスケッチを添付しました。

(3) 調査地区

調査地区は宇都宮市全域で行いましたが、各調査員は原則として、担当地区内の調査を行いました。

4 調査結果

調査員からは156件を超える調査報告書が提出されました。それらの内容については下の表のとおりです。この報告書に事務局の調査を加えて本冊子にまとめました。なお、冊子の内容は、金属工芸品の分類ごとにまとめ、その記述はできるだけ分かりやすいように努めました。法量は努めて計測いたしましたが、計測が困難な場合は省略させていただきました。また、高所の場合は計測がやや不明確なものもあります。

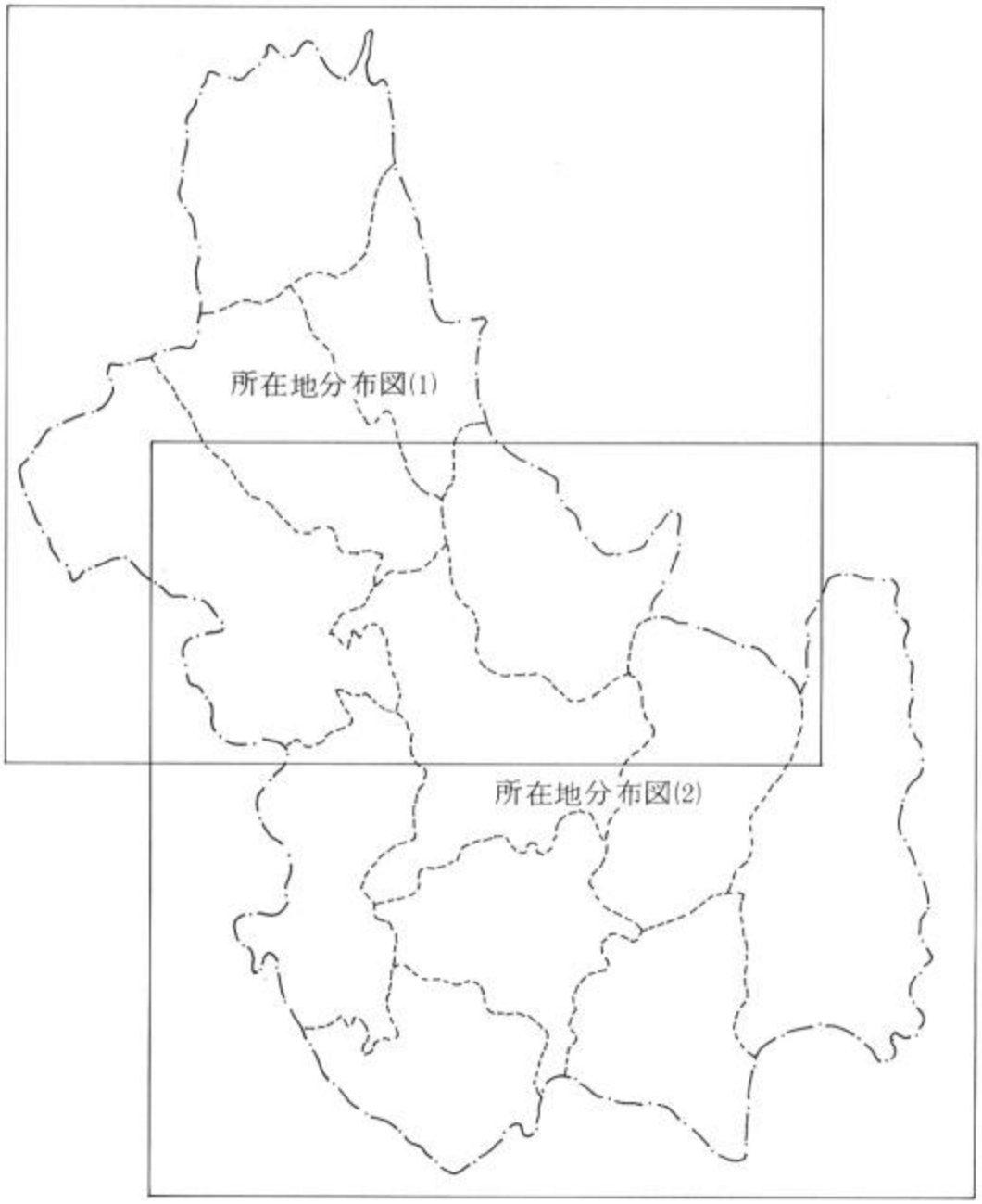
記載に関しましては、金属工芸品に銘文あった場合は、できるだけ記載するようにいたしました。また、所在地の略図を載せておきましたので、見学の目安にしてください。個人の所有や寺院等の場合、できるだけ見学前に許可を受けるようにしてください。

種類	件数		種類	件数		種類	件数	
	調査	掲載		調査	掲載		調査	掲載
鰐口	25	22	梵鐘	2	0	露盤宝珠	1	1
鈴	5	5	半鐘	2	2	絵馬	2	1
宝剣	4	4	鳥居	2	1	燈籠	1	1
鉦	6	5	彫像	7	0	天水桶	5	1
香炉	2	0	手水鉢	1	1	消防半鐘	87	80
龍辰	3	3	供養塔	1	1	小計	97	85
小計	44	38	小計	15	6	総計	156	128

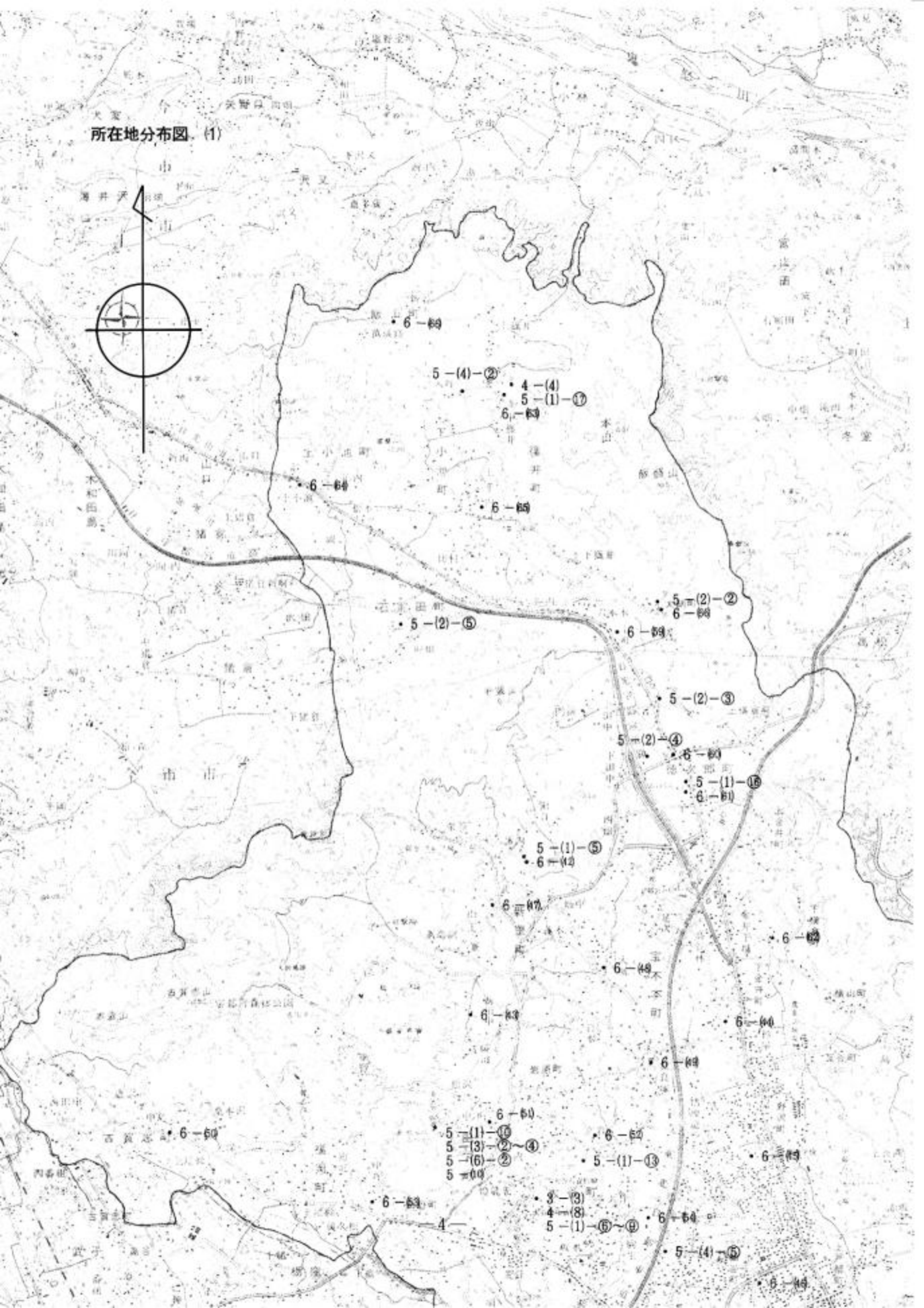
『宇都宮の金属工芸品』調査集計表

Ⅱ　『宇都宮の金属工芸』

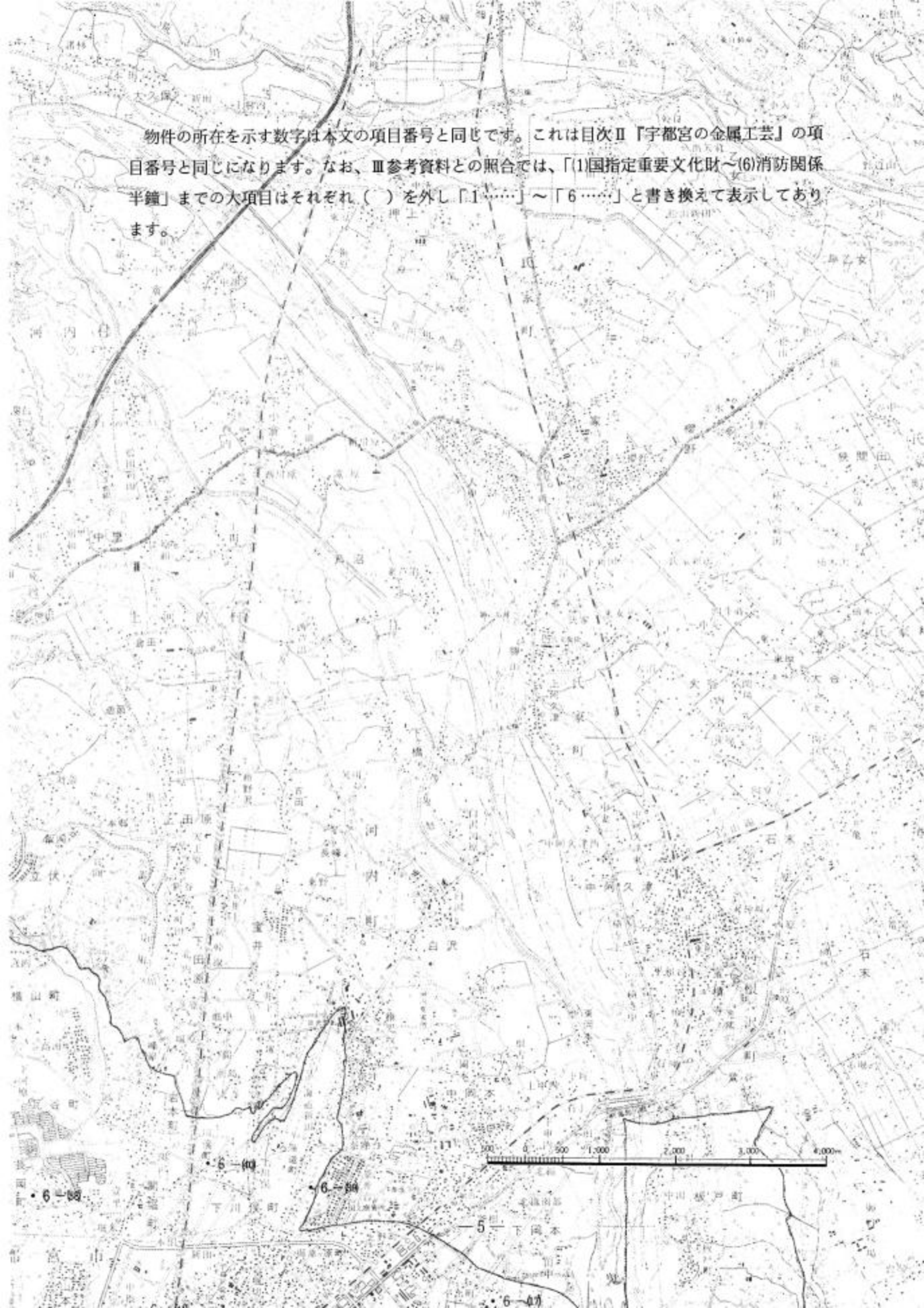
全　　体　　図



所在地分布図（1）


6－(66)
5－(4)－②
4－(4)
5－(1)－⑰
6－(63)
6－(64)
6－(65)
5－(2)－②
6－(66)
5－(2)－⑤
6－(59)
5－(2)－③
5－(2)－④
6－(60)
5－(1)－⑯
6－(61)
5－(1)－⑤
6－(42)
6－(47)
6－(62)
6－(48)
6－(43)
6－(44)
6－(49)
6－(51)
6－(50)
5－(1)－⑩
5－(3)－②～④
5－(6)－②
5－(10)
6－(52)
5－(1)－⑬
6－(45)
6－(53)
3－(3)
4－(8)
5－(1)－⑥～⑨
6－(54)
5－(4)－⑤
6－(46)

物件の所在を示す数字は本文の項目番号と同じです。これは目次Ⅱ『宇都宮の金属工芸』の項目番号と同じになります。なお、Ⅲ参考資料との照合では、「(1)国指定重要文化財～(6)消防関係半鐘」までの大項目はそれぞれ（ ）を外し「1……」～「6……」と書き換えて表示してあります。



所在地分布図 (2)

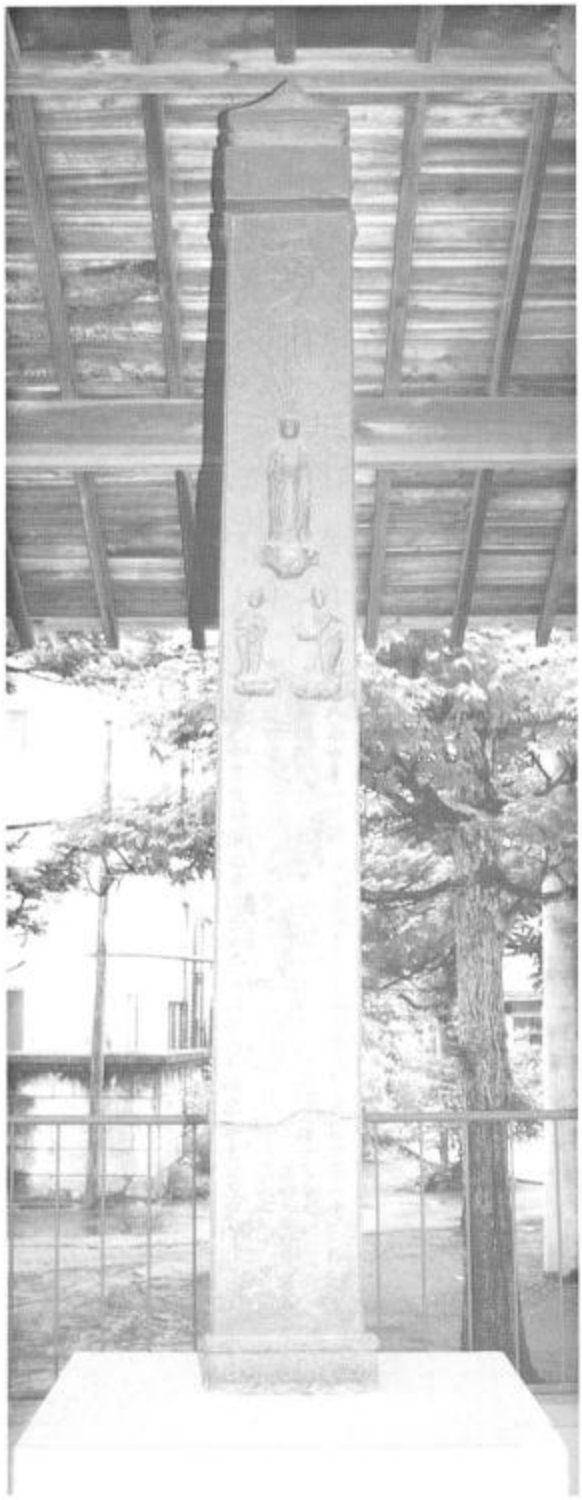
凡　例

記　号

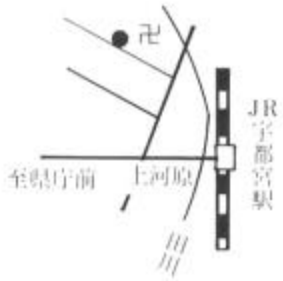
6－(3)
6－(16)
5－(11)
6－(18)
6－(1)
6－(4)
6－(26)
5－(12)(13)
6－(21)
4－(6)
5－(6)－①
1－(1)
4－(7)
5－(1)－②
6－(19)
5－(1)－④
6－(20)
6－(2)
5－(8)
2－(1)(2)
4－(3)
5－(9)
4－(5)
5－(1)－①
5－(3)－①
5－(1)－(3)
4－(2)
6－(22)
5－(7)
3－(1)(2)
6－(8)
6－(27)
6－(9)
6－(23)
6－(28)
6－(12)
6－(11)
6－(24)
6－(10)
6－(29)
6－(30)
6－(5)
6－(25)
4－(1)
5－(1)－㉒
5－(2)－①
6－(31)
6－(34)
6－(32)
6－(35)
6－(33)
6－(36)
㉑
6－(76)
6－(78)
6－(37)
6－(83)
6－(73)
6－(74)
500 0 500 1,000 2,000 3,000 4,000m

1　国指定重要文化財

(1) 鉄塔婆



（明44・8・9、工芸品・重要文化財）
所在地　大通り5丁目3－14清巌寺
管理者　樋口良弘
高さ332.7cm、幅32.0cm
厚さ5.2cm、重さ320kg



この鉄塔婆は、宇都宮城主の宇都宮貞綱が亡母13回忌供養のため、正和元年（1312）に建立したものと推定される。

建立当時は田川東の東勝寺にあったが、東勝寺が廃寺となったので、清巌寺に移された。嘉永2年（1849）8月暴風のため3つに折れたが、明治44年9月鉄わくをもって修復した。

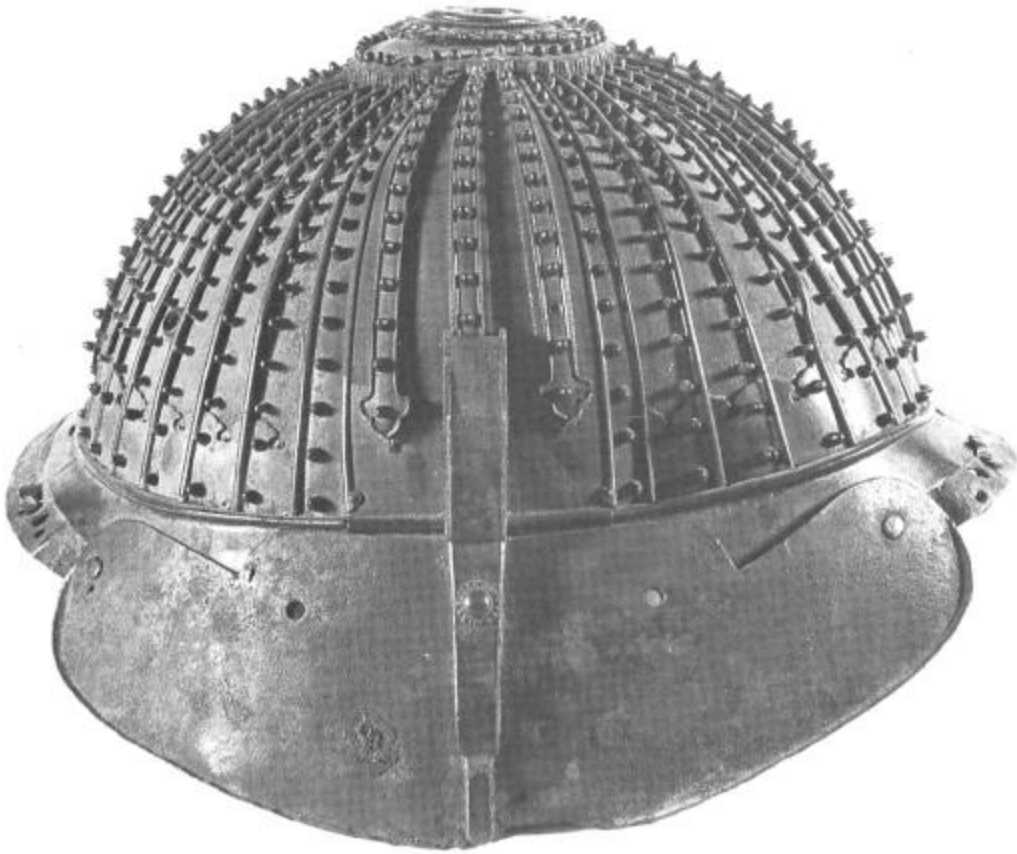
鋳造は、現在の佐野市天明で行われたものといわれるが、鉄製の塔婆は全国的に類例がなく、しかも、このように長尺なものを鋳造した当時の鋳物師技術の優秀さを実証するものとも言えよう。

表面には上部に梵字2字と阿弥陀三尊、その下部に四句の偈文、中部には「夫母者四恩之先也孝者百行之源也」に始まる願文が陽鋳されている。

2　国認定重要美術品

(1) 三十八間星兜

（昭9・9・1、考古資料・重要美術品）



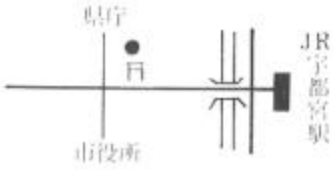
所在地　馬場通り1丁目1－1　宇都宮二荒山神社　　管理者　松　本　盛　邦

高さ約18㎝、口径約21㎝、重さ約2㎏

鉄地板をはぎ合わせて鋲を裏から打ち星型を現している。これが「星兜」の由来となっている。兜の八幡座は小菊の高彫となっている。

火災にあい、一部破損しており、腰巻の一部は後世の補足とみられる。

製作者は不明であるが、南北朝時代の作と推定され、姿形がよく整った優品である。



(2) 鉄製狛犬

（昭10・2・14　考古資料・重要美術品）

所在地　馬場通り１丁目１－１　宇都宮二荒山神社　　管理者　松　本　盛　邦

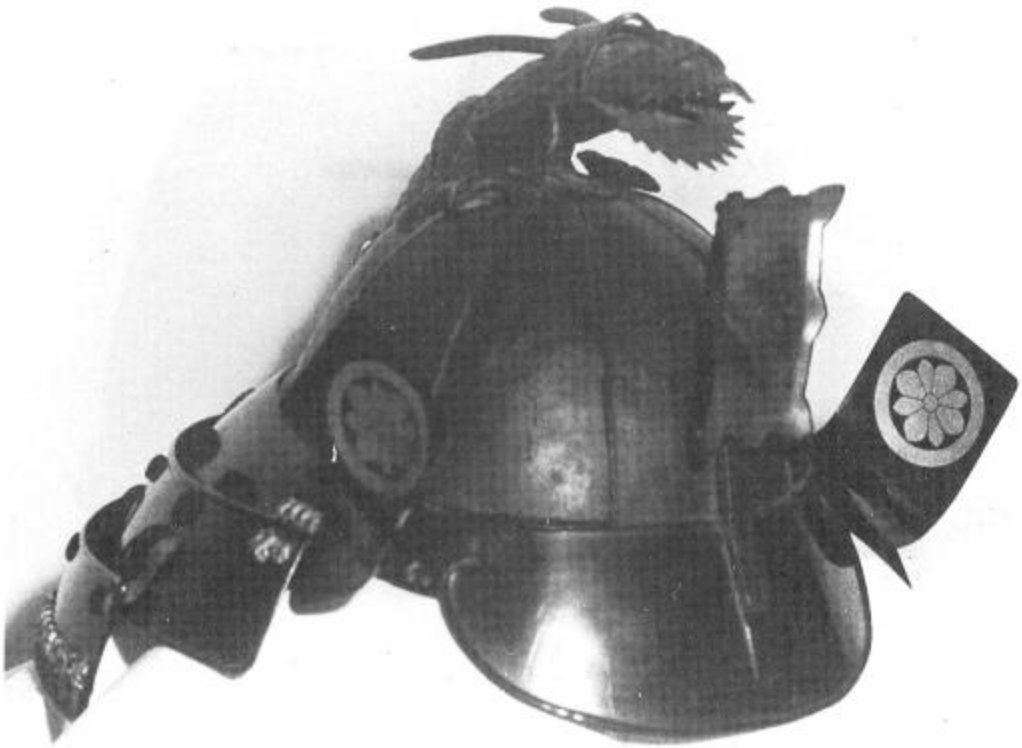
高さ 36 cm、重さ約 22 kg

普通狛犬は唐獅子風のものであるが、この狛犬は耳の垂れた可愛い感じの日本犬である。また、鋳鉄製ということも珍しいが顔形や胸の張り具合、後足に弧状の隆線を鋳出するなど特色をよくとらえ、そのできばえは見事でありまことに貴重である。背に「建治三年（1277）丁丑二月　吉田直連施入」の陽鋳銘がある。鎌倉時代の作であり、佐野の大明鋳物といわれている。無垢で型は左右に割ったもので、前足は棒状で別の型を用いている。左前足が１本失われているのは火災にあったためであるといわれている。

3　栃木県指定文化財

(1) 兜銘宗久

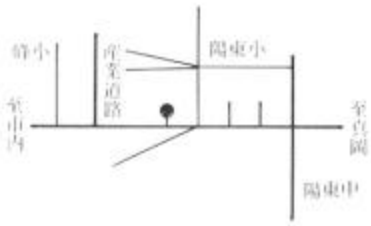
（昭36・5・6、工芸品）



所在地　東峰町3002　　所有者　福　嶋　静　子

作　者　明珍宗久

鉄製黒漆塗九間筋兜で後頭部の１間を残し次の諸神名が刻まれている。〈不動明王、大国主命、住吉大明神、正八幡大神、天照皇大神、春日大明神、稲荷大明神、大国主大神、摩利支天王〉



作者明珍宗久は上野国（群馬県）に生まれて京都で修業し、後下野国足利に居住した人である。明珍家はこの宗久を始祖とし、３代４人に及んでいる。

この兜は室町末期の作品であるが、宗久の作品は他に見られず貴重な資料である。

(2) 鉄錆地六十間筋兜

（昭54・2・2、工芸品）

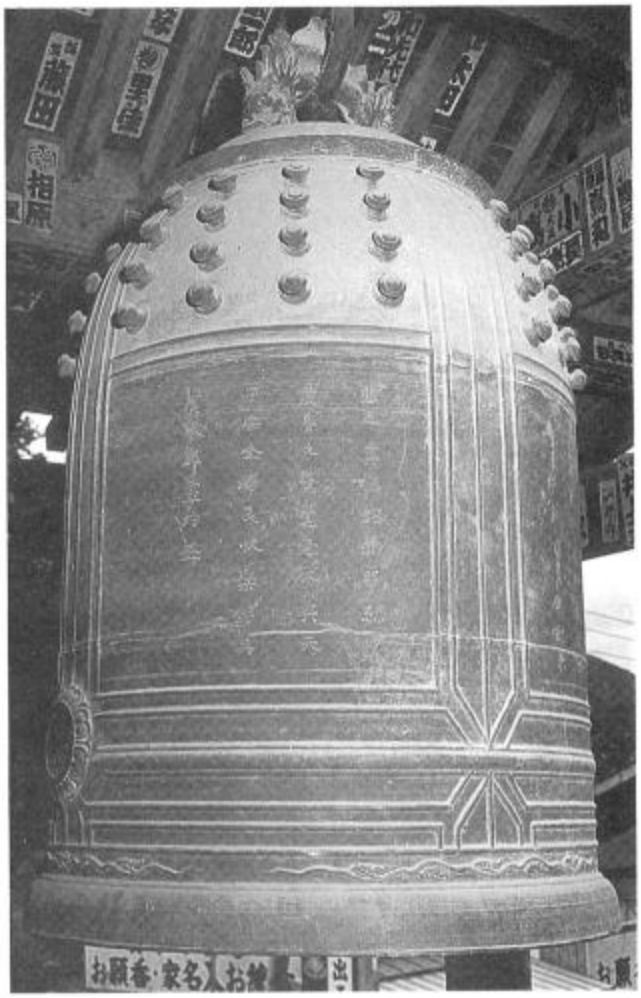
所在地　東峰町3002
作　者　明珍宗久
銘　文　「野州住久吉　永正十七年二月日」
所有権　福　島　静　子
寸法形式　前後径（眉庇を含める）29.6㎝、左右巾22.9㎝、高さ14.8㎝、鉄錆地60枚限り眉庇共鉄（赤銅覆輪）しころなし

この兜は天辺赤銅菊座で地鉄の鍛え及び筋立が優れており見事な作品である。

作者久吉は、銘鑑によると明珍宗久の子で天正頃（1573～91）の人となっているが、永正17年（1520）の銘文は銘鑑賞に見る年代とはかなり、かけ離れている。一族のうち野州に住んだのは、宗久、吉久、吉員、久吉の4人で足利、大田原等に居住したといわれているが、銘に野州住を冠したものは稀であり、郷土の甲冑師の作品として貴重である。

(3) 銅鐘（どうしょう）

（昭63・4・3、工芸品）



所在地　大谷町1198　大谷寺　　管理者　高　橋　敬　忠

総高110.0㎝、口径48.5㎝、口厚7.5㎝　作　者　戸室重郎兵衛尉藤原定国

陰刻された銘文によれば、大谷寺中興第4世応賢〈宝永7年（1710）示寂〉が願主となり宇都宮の鋳工戸室定国に鋳造させ元禄8年（1695）に奉納されたものである。鋳師戸室家は江戸初期から宇都宮鉄炮町（現馬場通り1丁目）に住み、代々宇都宮藩御用鋳物師として多くの品が遺存するが、本鐘は、現在判明している作品の中でも最古の紀年銘をもつものである。

梵鐘としては小形ではあるが、端整な形姿に古様の見られる鐘であり、池の間4区には造鐘の由来、経文（涅槃経）、願主、鋳造年月、鋳工名が記されている。

（P.71参照）

4　宇都宮市指定文化財

(1) 銅造宝篋印塔

（昭33・6・3、工芸品）

所在地　上桑島町1041　金剛定寺　　管理者　平　沢　照　普

作　者　戸室将監藤原元蕃　　総高4.65m、銅　部　3.3m

大谷石部1.35m

宝篋印塔は、鎌倉時代から南北朝時代にかけて盛んに建てられたもので、石造りが多く、銅制のものはまれにしか現存していない。

この塔は郷土の鋳物師により、徳川吉宗時代（1736年）の作であるが気品高く、当時の工芸美術、特に鋳造技術の水準を知るに足るものである。

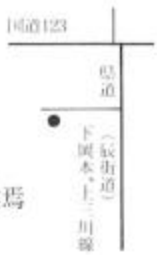
銘文

元文元年中冬吉祥日供養畢

金剛定寺第二十七世現住覚純代

奉造立宝篋印塔壱基

為自他法界二利円満



願主

野州河内郡石井村自信法道建焉

宇都宮住戸室将監

藤　原　元　蕃　作

(2) 銅鐘

（昭33・7・21、工芸品）

所在地　竹下町1107　同慶寺

作　者　戸室将監定国

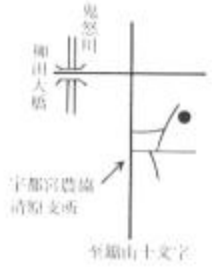
管理者　福　田　玄　英

口　径　88㎝

銘文によれば、この銅鐘は同慶寺住職が本願となり、近隣の人々の寄付を仰いで享保元年（1716）に鋳造したものである。

寄付者は板戸の坂本忠左衛門を始めとし、田宿8名、竹下5名、道場宿12名、鑪山5名柳原5名となっている。また、鋳工は宇都宮城下戸室将監定国とある。

この銘文は当時の信仰の概要と檀那の協力状態を知るに足るものであり、また戦時中の供出をまぬがれた貴重なものである。



(3) 二荒山神社本殿勾欄擬宝珠（4箇）

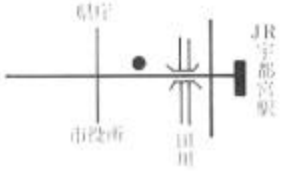
（昭36・9・18、工芸品）

所在地　馬場通り1丁目1－1　二荒山神社　管理者　松　本　盛　邦

高さ約65㎝、周囲約50㎝

4箇とも同形の唐金製。銘は陰刻下記のとおり

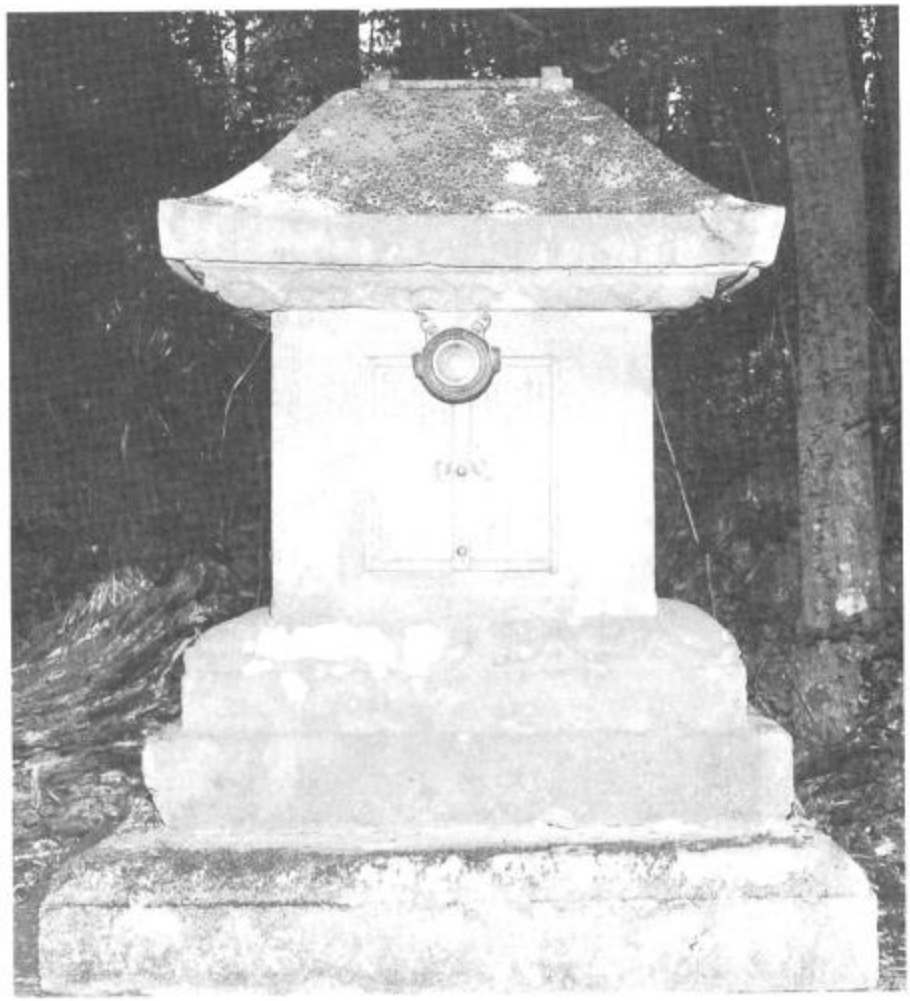
「下野国河内郡　　備前代
宇都宮大明神　　石川吉兵衛
御建立　　御大工
征夷大将軍源　　長谷河源兵
家康　　吉久」
慶長十季乙末七月吉日
奥平大膳大夫
伊奈備前守
大膳代
山崎半兵衛



慶長10年（1605）は家康が江戸に開幕して2年後のことである。天正13年（1585）北条氏直の軍によって神社が焼失した後、宇都宮城主奥平家昌が祖父に当たる家康に請うて、神社を再建した時の記念物である。

(4) 篠井神祠（しのいしんし）

（昭42・3・25、考古資料）



所在地　篠井町826

所有者　阿久津　義　淳

この神祠は約1m四方の石祠で、銅製の扉の外面に「日光山奉寄進覚」が陰刻されている。

主として日光各社に太刀、石塔、地蔵尊像、鰐口など20点を寄進したことが扉の左右二段に刻まれているのであるが、この寄進覚書の中に「宇都宮外久次良大明神鰐口－」と刻まれている。

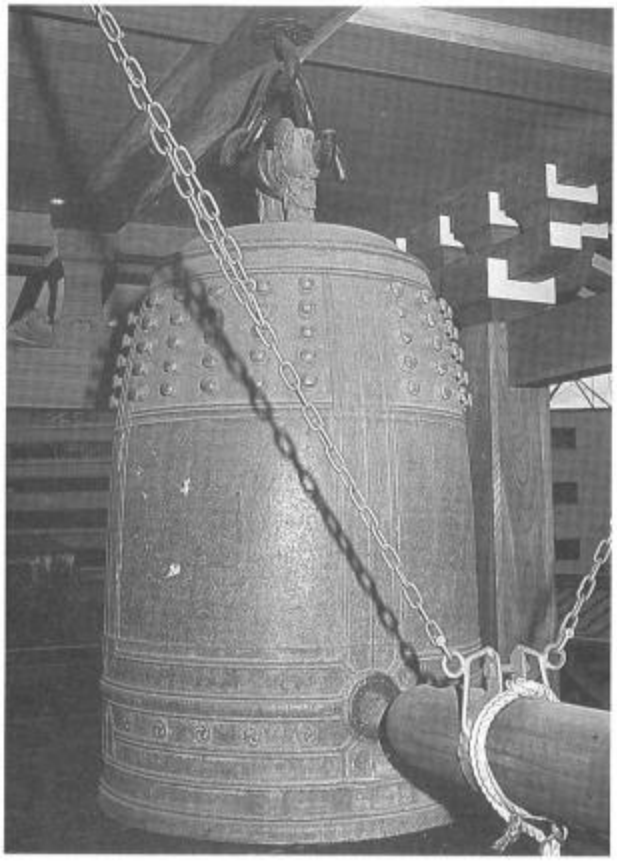
この大明神は現在の徳次郎智賀都神社であり、徳次郎の地名の起原を明らかにする上で貴重な資料である。

なお、寄進覚の末尾に「寛文七丁未年正月吉祥日　理性房良伝敬白」とあるところから1667年、江戸時代中期のものであることがわかる。

（鰐口についてはP.29⑰参照）

(5) およりの鐘

（昭59・3・21、歴史資料）



所在地　大通り4丁目2－22　　管理者　黒崎貞遼

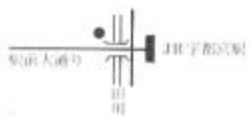
総高117cm、口径81cm

宝蔵寺楼門の上部が鐘楼となっており、そこにあって現在も使用されているものである。

この鐘は作者、年代が不明であるが、坪井良平著「日本の梵鐘」には「形状は南北朝から応永期（1394～1427）にかけての特徴が示されている」とありこの頃鋳造されたものと推定される。

鐘の下帯部には宇都宮氏の家紋である巴紋（三ッ巴）が20個ほど配してあるところから宇都宮氏が寄進したものと推定される。

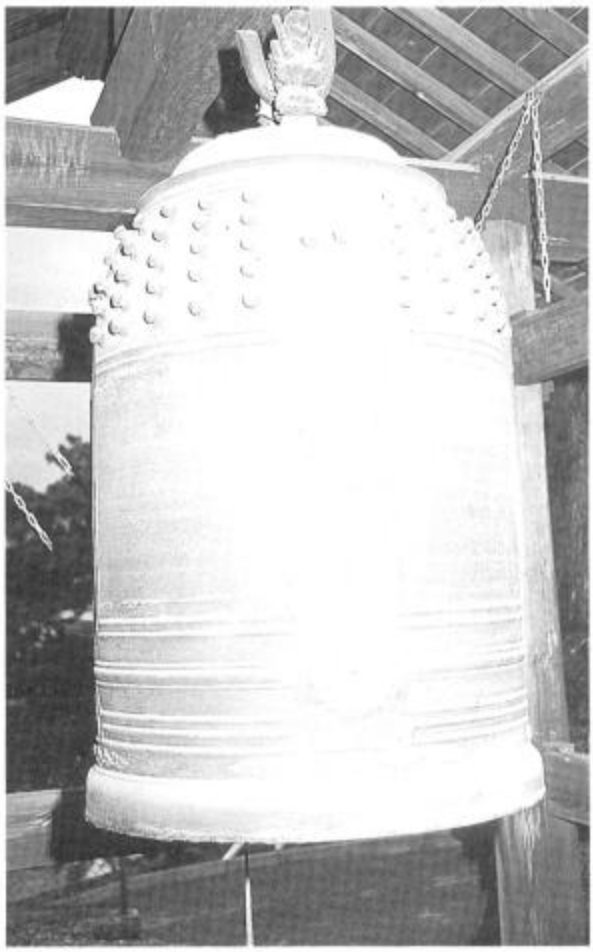
弘長2年（1262）宇都宮氏によって田川の東側に東勝寺が建てられた。この寺は永仁6年（1298）釈迦堂町（現二荒町附近）に移って慶長2年（1597）宇都宮氏の滅亡とともに廃寺になったが、その後もこの寺跡附近の鐘楼に吊ったのがこの梵鐘であるといわれている。



龍頭の紋様がひげを蓄えた人面になっているのも類例少ないものと思われる。宇都宮氏の興亡とともに歩んできたこの鐘は、おより（およる→おやすみになる→時報）の鐘として江戸時代から民衆に親しまれてきた由緒あるものであり、さまざまな経緯を経て昭和19年宝蔵寺に移管されたものである。

(6) 銅鐘（どうしょう）

（昭63・3・22、工芸品）



所在地　塙田1－3－3慈光寺　　管理者　吉田真祥

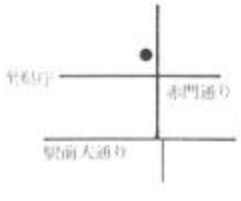
作　者　戸室十郎兵衛藤原貞国　　総高　145.0㎝、口径60.0㎝

江戸期〈宝永元年（1704）の銘〉の梵鐘としては比較的大型で堂々たる威容を持つ。

鋳技も見るべきものがあり、特に地元鋳物師による数少ない作品として貴重である。

本銅鐘の池の間1区から2区にかけて銘文が陰刻されているが、この銘文によると、当慈光寺には草創当時から鐘があったが破損してしまったので、当時中興第12世見誉雲外の時大工町の竹岸孫惣が施主となり、地元の鋳工戸室貞国等が鋳造に当たり、完成したことが記されている。

撞座は八葉蓮華文で、盛り上がりに欠けるが径14.8㎝と鐘身に比して大きくなっているのが本鐘の特徴である。なお、撞座の位置は竜頭の長軸線上に2個撞座中心高は低目となっているところに時代の特徴がある。



（P.70参照）

(7) 銅鐘（どうしょう）

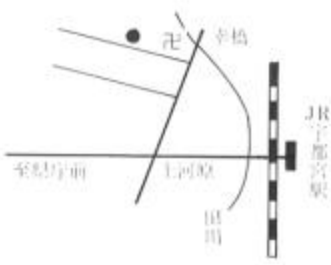
（昭63・3・22、工芸品）

所在地　大通り5丁目3－14　清巌寺　　管理者　樋口良弘

作　者　戸室将監藤原元善　　総高133.5㎝、口径58.0㎝

本鐘は口径に比して鐘身の丈がやや高くすんなりとした形を示している。

竜頭の頂部に据えられた宝珠はきわめて大きく、また、竜首は直接笠形を噛まず、竜口から出た円柱によって笠形に接続している。笠形の盛り上がりは高く、外周縁の肩も張り出している。池の間第1区には梵字（キリーク）1字を大きく陽鋳し、第2区から第4区まで銘文が陰刻されている。銘文は第2区から第3区で旧鐘銘を記し、第4区には万治3年（1660）鋳造の旧鐘が火災により破損したため、今小路町の小牧時敏が施主となり、地元鋳工戸室元善に再鋳させたことが陰刻されている。



本鐘が鋳造された18世紀中葉は梵鐘鋳造の最盛期であり、大部分が量産されたと文献等にあるが、本鐘は精巧に鋳造されており、形姿も端正である。

また、銘文の旧鐘銘は清巌寺の歴史や当時宇都宮に居た鋳物師の存在等を知るうえに貴重な資料でもある。（P.71参照）

(8) 銅灯籠（どうとうろう）

（昭63．3．22、工芸品）

所在地　大谷町1198　大谷寺　　管理者　高　橋　敬　忠

作　者　戸室将監藤原元蕃　　総　高　246.0ｍ

銘　（正面）　野州河内郡新里村施主

奉寄進　永代常夜燈一基

享保元丙申天八月吉日　高橋氏善左衛門吉勝

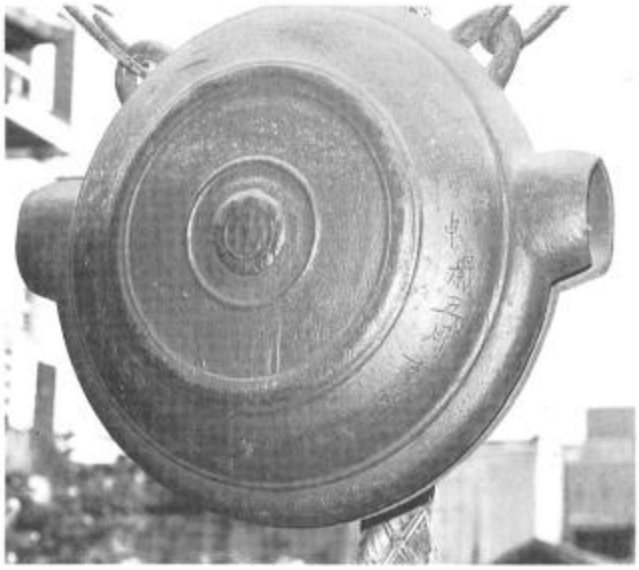
（背面）　宇都宮住　冶工　戸室将監　藤原　元蕃

八角形面取りの基礎石に据えられている灯籠である。銘によれば、享保元年（1716）寄進である。地元鋳物師によるこの灯籠には多くの意匠が施され、宝珠・笠・火袋・中台・竿・反花・基礎等の各部分にその意匠と優れた鋳技をうかがうことができる。一部欠損はあるものの江戸期の特徴をよく表わしている大型で均整のとれた安定感のある灯籠である。

5　未指定文化財

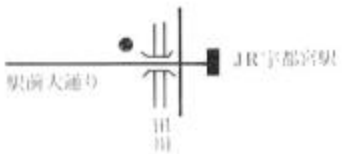
(1)　鰐口（わにぐち）

①　宝蔵寺不動堂の鰐口



銘　天明八戊申歳五月吉辰日
　　下野国塩谷郡高根沢村迎戸
　　鋳工師　大野伊藤右衛門
　　施　主　阿久津半之助助好勘

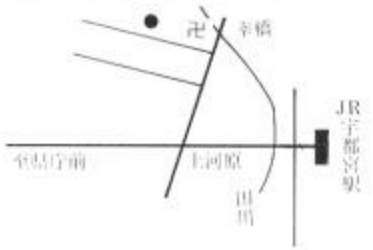
面径32㎝、横幅40㎝、青銅製、江戸時代中期～後期（1778）の作である。撞座は素文で永年使われたためか荒れているが他に損傷はない。



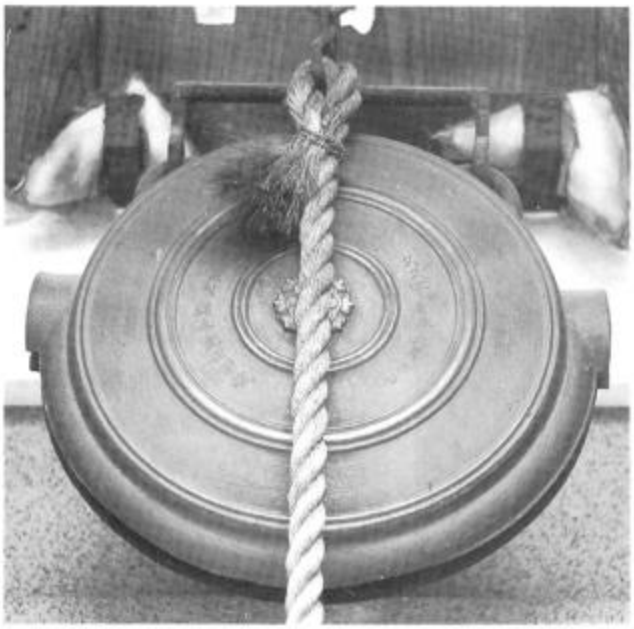
②　清巌寺呑龍堂の鰐口

銘
奉　為慈雲院行譽廣徳益喜居士菩提
納　施主　青森市　室津藤吉
　　室津定四郎
　　室津市郎
　　昭和七年九月六日

面径30.3㎝、横幅35.5㎝、青銅製1932年、昭和初期のものである。奉納の2文字は陽鋳である。



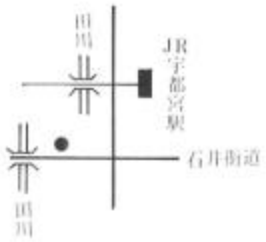
③　善願寺観音堂の鰐口



銘　文久３年癸亥年六月吉日
　　今泉村　願主　丸田源蔵

面径30㎝、横幅33㎝青銅製

銘によれば江戸時代末期のものである。損傷はなく良好な状態で使われている。表面は紐によって３区に分けられ内区に銘がある。



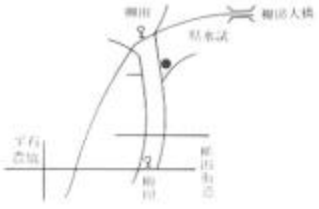
④　柳光寺の鰐口

銘　表　奉　薬師堂
　　納　下柳原村

　　裏　文化十癸酉年
　　四月吉祥日

面径22㎝、横幅27㎝、青銅製、江戸時代後期（1813年）のものである。

柳光寺は廃寺となって、現在は柳田町自治会公民館として使用中。

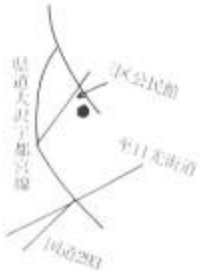


⑤　新里３区毘沙門堂の鰐口

銘　元禄十三年庚辰十一月吉日
　　当村住　高橋善左エ門

面径 22 ㎝、横幅 25 ㎝の青銅製

江戸時代中期（1700 年）のものである。撞座は八葉蓮華文であるが、永年の使用でかなり荒れている。本市内の鰐口としては古い方である。この毘沙門堂は第二次世界大戦中までは高橋正之家の管理下におかれていたが戦後（1945 年以降）は自治会によって管理されている。



⑥　大谷寺山門の鰐口

山門を入ってすぐの礼拝所に懸けられている青銅製鰐口で、無銘ではあるが面径 42 ㎝、横幅 48 ㎝とかなり大型のものである。

大谷寺には 4 個の鰐口が見当たるがいずれも直径 40 ㎝を超える大型のものである。銘が確認されてものは宝物館に収蔵されているものだけである。

⑦　大谷寺本堂の鰐口

高所のため銘不明、面径約 65 ㎝、横幅約 70 ㎝、市内の鰐口の中で最も大きいものであると思われる。金銅製の堂々たる姿形である。

⑧　大谷寺宝物館の鰐口

銘　奉納千午千眼如意安全所
於ヤ女
上野七左衛門勝正
右為之助
寛文七丁未天九月吉日
大工真壁郡藤原之任朝作
祖母井村　柳田利衛門

青銅製鰐口　面径 54.0 ㎝、横幅 61.5 ㎝、厚さ 29.0 ㎝

江戸時代前期（1667 年）に属する頃のもので市内で最も古いものと思われるが、損傷も少なく保存状態も良い。

撞座は複弁の八葉蓮華文で紐によって 3 区に分けられ、外区に銘が陰刻されている。

⑨　大谷寺阿弥陀堂の鰐口

無銘ではあるが面径 42 ㎝、横幅 47 ㎝あり、かなり大型の青銅製鰐口である。

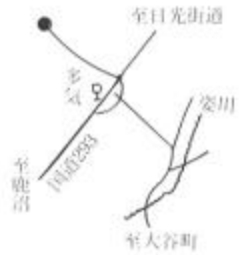
⑩　持宝院の鰐口

銘　明治廿五年　宇都宮住
　　三月日　鋳工　戸室竹次郎
　　宇都宮江野町
　発起人　佐藤喜助
　　加藤留之丞
　世話人　（市内在住者17名陰刻）

面径57㎝、横幅67㎝、厚さ20㎝の青銅製、撞座は複弁の八葉蓮華文で紐によって3区に分けられ、外区に「奉納」の陽鋳及び陰刻銘がある。この刻銘名は民衆とのつながりを知る一つの資料でもある。

1892年の作、比較的新しいものだけに損傷なく保存状況もよい。戸室鋳物師の最後の作品と思われる。

撞座の紋様のいたみもなく美しい鰐口である。



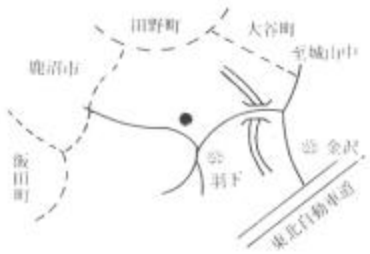
⑪　羽下薬師堂の鰐口

銘　宇都宮材木町　秋葉金蔵
　　文久二歳壬戌二月吉日

江戸時代後期（1862年）の作である。

面径38㎝、横幅43.5㎝

金鍍金の痕跡がある青銅製の鰐口。

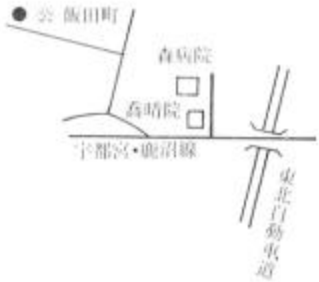


⑫　飯田町旭観音堂の鰐口

銘

下野國河内郡八ッ寺村宝蔵住　早善主干時寛保三癸亥四月吉日

江戸時代中期（1743年）のものであるが損傷がかなり進んでいる。面径約30㎝。なお銘にある八ッ寺山宝性寺は現在鹿沼市千渡にある。

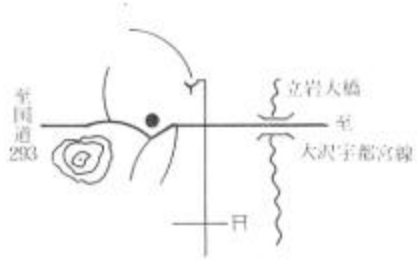


⑬　立岩地蔵尊堂の鰐口

無銘

延命地蔵尊を祀った堂宇にかけられている鰐口であるが奉納年代不明。

面径23.5㎝、横幅27.0㎝の青銅製で内区に鳳凰と唐草模様の陽鋳がある。

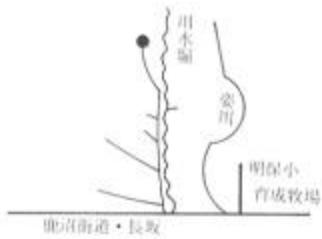


⑭ 大道寺観音堂の鰐口

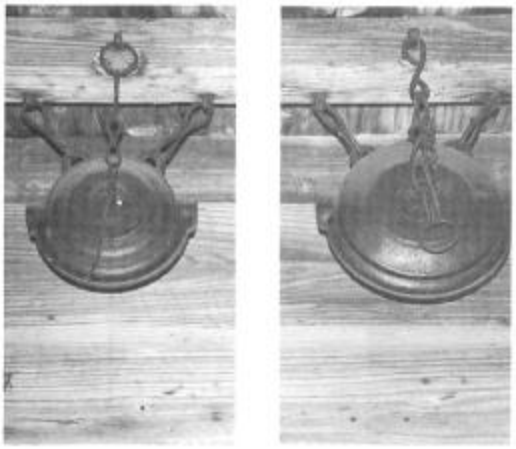
市指定「木像十一面千手観音坐像」を祀る堂宇にかけられているもので、無銘、面径13.3㎝、横幅16.0㎝。撞座は単弁の八葉蓮華文の鰐口であるが風雨による損傷が進んでいる。

⑮ 麦倉家薬師堂の鰐口

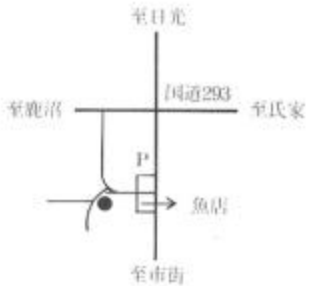
銘　奉掛薬師御宝殿
　　施主　宇都宮傳馬町
　　長谷川治兵衛
　正徳五乙未天二月吉
面径21㎝、横幅22㎝、厚さ7㎝
江戸時代（1715）に奉納された青銅製の鰐口であるが、かなり傷んでいる。



⑯ 徳次郎薬師堂の鰐口



無銘の鰐口が二口並んで掛けられている。横幅は大約30㎝、小約20㎝の青銅製鰐口。

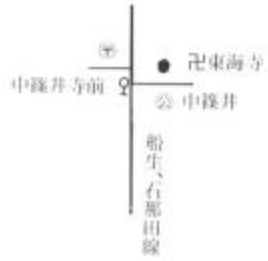


⑰　篠井神祠の鰐口

銘　阿久津保右衛門
　　享保九辰年八月吉日

江戸時代中期（1724 年）に奉納されたものである。

面径約 11 ㎝磨耗が進んでいる。



⑱　光音寺薬師堂の鰐口

銘

奉掛　御宝前　宝暦五年三月吉日　宝暦亥歳下野國河内郡西川田村　施主　小川茂左衛門

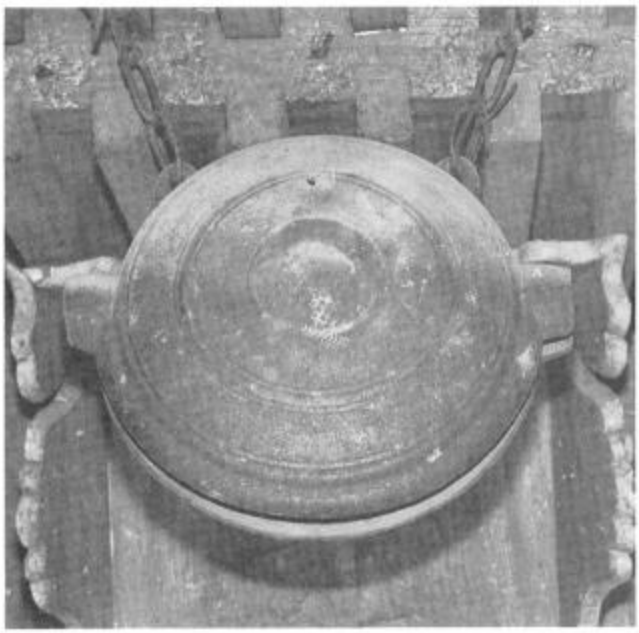
面径 35.0 ㎝、横幅 39.0 ㎝、江戸時代中期（1755 年）のものであるが保存状態は比較的良い。

⑲　高照院墓域の鰐口

銘　奉掛御寶前欠乃下村
　　元禄十二年正月八日
　　左藤太郎左ヱ門母

面径13.5㎝、横幅15.5㎝の青銅製鰐口が墓所の祠の前に掛けられている。江戸時代中期（1699年）のものである。「太郎左ヱ門は、下欠村の庄屋の長男として生まれたが、大変な怠け者であったため、領主からその所業をとがめられ、所ばらいになった」という伝承がある。

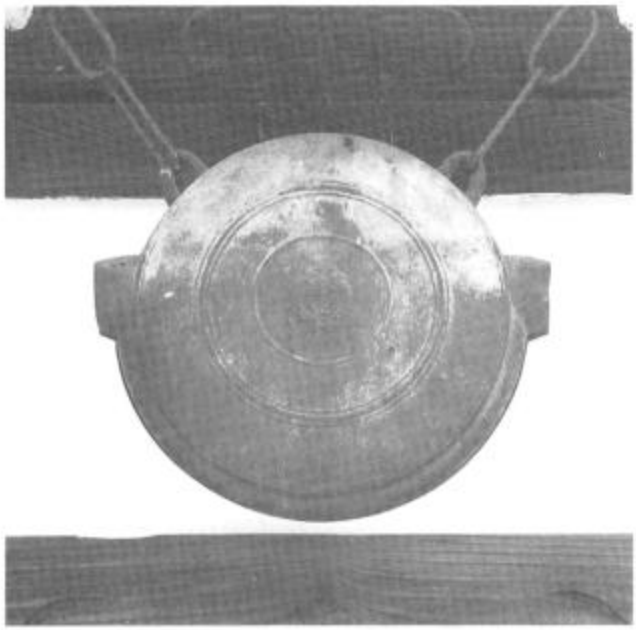
⑳　幕田町薬師堂の鰐口



銘　奉掛　御寶前　幕田村念佛同行
　　寛保元辛酉歳十一月吉日

面径30.3㎝、横幅36.0㎝の青銅製鰐口である。江戸時代中期（1741年）のものである。撞座上部及び目の部分に損傷がある。

㉑ 正光寺太子堂の鰐口



銘　寛保元年酉八月吉日
　　宇都宮領上三田村加藤善左衛門

面径24.0㎝、横幅29.5㎝、江戸時代中後期（1741年）のものである。若干損傷が見られる青銅製の鰐口である。

㉒ 金剛定寺将軍地蔵堂の鰐口

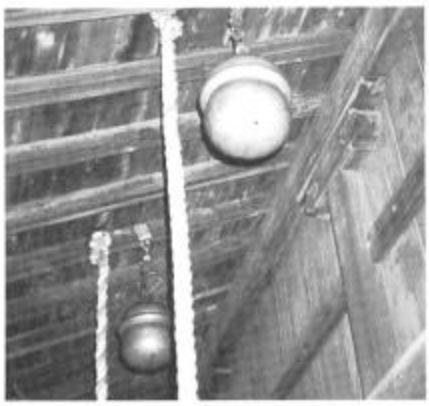
銘表　奉掛来嶋山地蔵堂御寶前
　　寛保四年甲子年正月吉祥日

裏　施入之輩各為二世安楽也
　　金剛定寺現住覚純代造之

面径23.0㎝、横幅27㎝の鰐口である。江戸時代中後期（1744年）のものであるが損傷なく現在に至っている。銘は外区に陰刻されている。同寺の宝篋印塔建立8年後のものである。

(2) 鈴（すず）

① 上篠谷町両宮神社の鈴

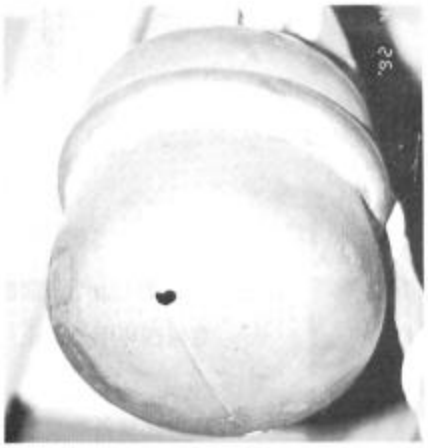


銘　不明

町内上・下字にあった雷電神社（上）と熊野神社（下）を大正4年ごろ合祠したもので両方の宮を合わせたということで両宮神社とよばれるようになったということである。

銅製

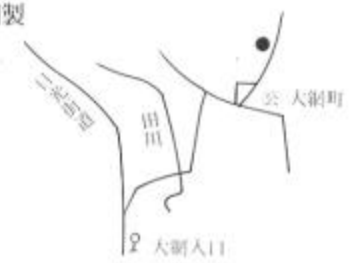
② 大網町高靇神社の鈴



銘　不明

地域の古老の言によると鰐口より経済的という理由で鈴が付けられたとのこと。

そのような点から比較的新しいものではないかと思われる。高さ約20 cm、横幅約15 cm、銅製

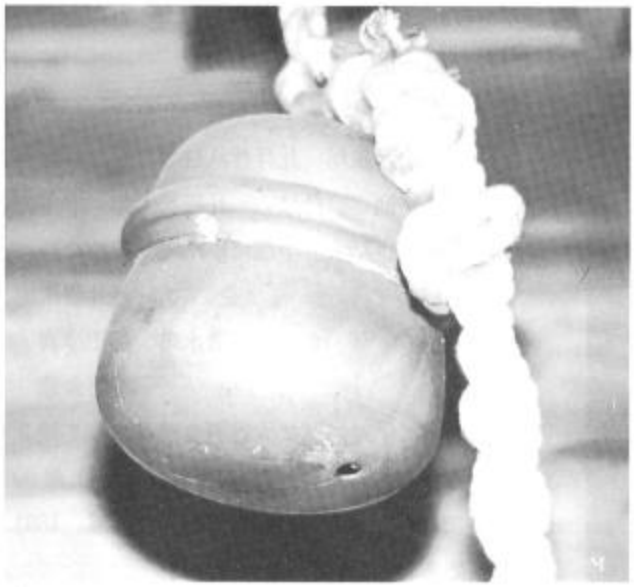


③ 智賀都神社の鈴

徳次郎町中町の智賀都神社には、地域の古老の言によると以前は鰐口がかけられていたが、いつの頃からか鈴に変わってしまったとのことである。銘不明

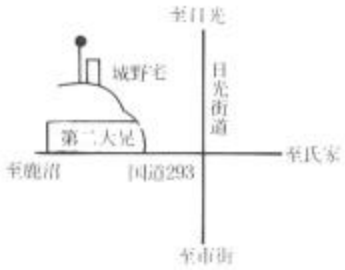
高さ約25 cm、横幅約20 cm銅製

④　徳次郎町神明宮の鈴



銘　不明

社殿の軒下に掛けられている。高さ約15㎝、横幅約13㎝、銅製



⑤　石那田町高靇神社の鈴

銘　昭和五年一月吉日
奉　区長　石鉈仲雄
　　氏子総代
納　　金田辨吉
　　見目鶴吉
　　大草太次郎
　　福田善三郎
　　松島藤吉
　　半田亀一
　　高橋源吉
　　宇都宮市泉町二十二番地
　　高橋末吉

石那田町岡坪にある高靇神社の鈴は高さ42.0㎝、横幅30.0㎝の銅製である。

陰刻された上記銘文がある。

(3) 宝剣（ほうけん）

① 宝蔵寺の宝剣

銘（表）　成田山

（裏）　奉　納

明治廿四年　九月廿八日

鋳物師　　今泉　　井坂兵太郎

発起世話人　宇都宮小門町　菊地市蔵

〃　　酒井彦次郎

清水町　藤田彦吉

〃　　星野粂蔵

山門を入ってすぐ右側に大谷石を礎石にして建立されている宝剣である。高さ 210 ㎝、幅最広部 20 ㎝、最狭部 15 ㎝、基部の厚さ 17 ㎝の鉄製。1891 年の奉納である。

② 持宝院参道脇の宝剣

銘　安政四歳在丁巳春三月

願主　鹿沼田町中

御鋳物師　小野口惣兵衛

藤原　信武

小野口五郎右衛門

藤原　有恒

参道階段途中の左側にある宝剣で、高さ 406 ㎝、剣部の最広部 30 ㎝、厚さ 11 ㎝の鉄製江戸時代後期（1857 年）の奉納である。持宝院には屋外に宝剣が 3 基奉納されているがこの宝剣が最も古くかつ最も大きなものである。

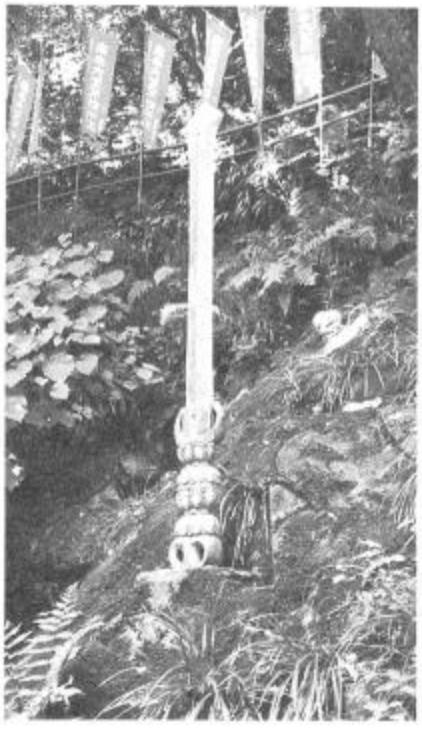
③　持宝院本殿前の宝剣

銘　奉　納
明治四拾五年第五月
鹿沼町
鋳造所
太田五郎平
藤原有恒
職工一同

本体の高さ 240 ㎝、最大幅 39 ㎝、最狭幅 14.5 ㎝、厚さ 9 ㎝、台座高 48.8 ㎝の青銅製。表参道階級を登り切ってすぐ左側、本殿前広場の一偶に位置しているもの。

1912 年に奉納されている。

④　持宝院地蔵尊堂脇の宝剣



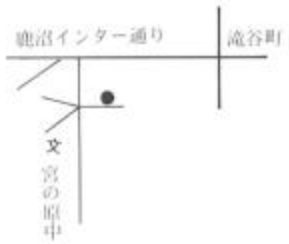
銘　宇都宮市清住町
発起人　北村政五郎
同材木町
賛助員　杉山新太郎
城山村瓦作
同　池田　緑
彫刻家　河合　豊友
伊藤勝五郎　藤原信重作

高さ 186 ㎝、最大幅 22 ㎝の青銅製宝剣、奉納年不明

地蔵堂脇の断崖の中腹に建立されている。

(4) 鉦（かね）

① 能満寺第二別院鶴田観音堂の鉦



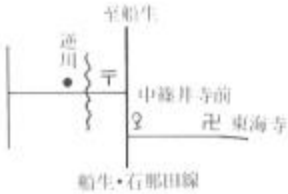
銘　欲蓮社良鐵信阿観降歳誉麟空和尚代求
　　文化七年庚午三月日　西村和泉守作

江戸時代中後期（1810年）の作である。

上面径21㎝、下端径23.5㎝高さ7㎝、脚は3本で各2㎝

葬儀用のものである。

② 下小池町の鉦



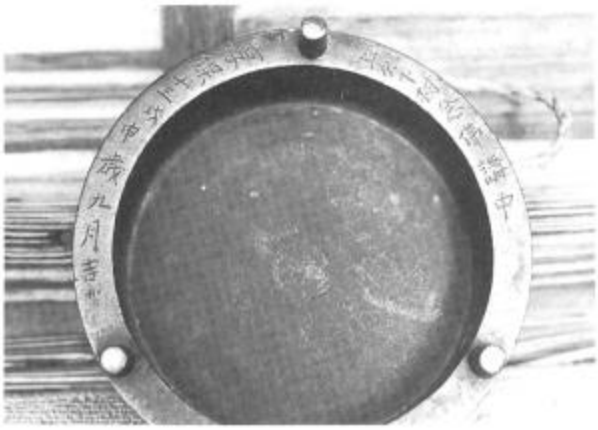
銘　宇都宮　戸室将監作
　　野州河内郡下小池村二十三夜念仏供養
　　施主　二十三人
　　願主　堪誉林清
　　宝暦七年丁丑十一月吉日

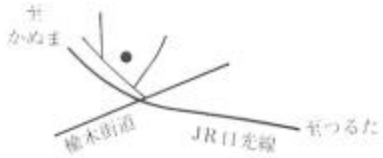
江戸時代中後期（1757年）の作である。

上面径41㎝、幅10㎝とかなり大型である。吊り手によって下げた状態で片面を打ち鳴らすようにできている。

作者は宇都宮在住の戸室将監である。

③　宝林寺の鉦





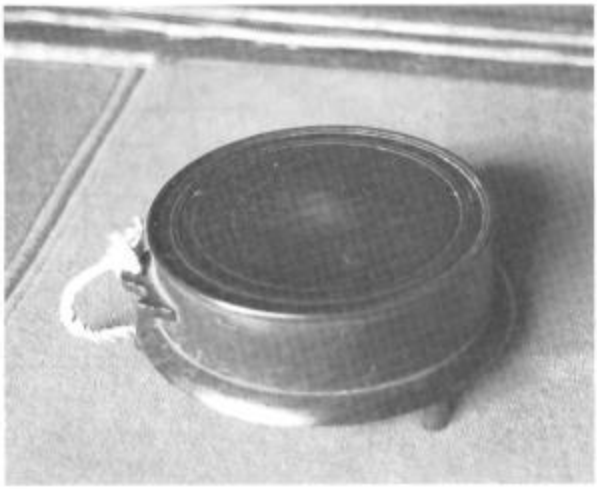
江戸時代中期（1728年）に作られたものである。

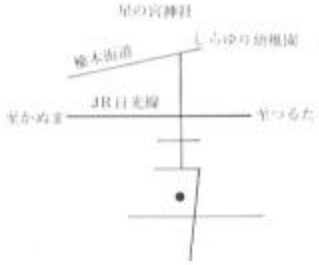
享保8年五十里洪水の時田川流域は広く被害を受け、その時の死者の霊を弔ったという。

上面径16.5㎝、下端径20.1㎝、高さ6.2㎝脚（3本）長1.1㎝

銘　享保十三戊申歳九月吉日
　　上欠村念佛講中

④　東福寺の鉦





江戸時代後期（1845年）の作である。

上面径21.0㎝、下端径23.5㎝、高さ7.0㎝、脚（3本）長2.0㎝

銘　弘化二乙巳年霜月吉祥日
　　野州河内郡下砥上村念仏講中

⑤　駒生町上駒生の鉦

直径約30㎝、幅約12㎝の銀色塗装を施した鉦。望楼上にあって半鐘と同じ役割を果たしている。側面表に戒名らしいものが多数刻まれている。昭和10年ごろはすでに下げられてあったという。

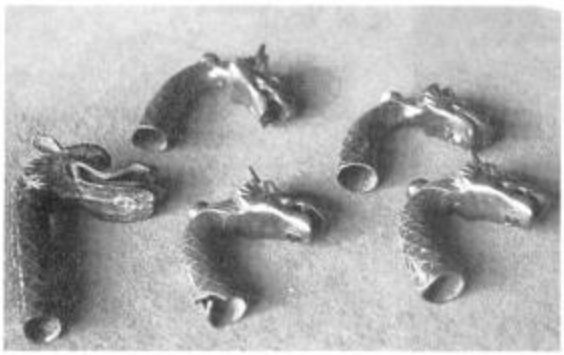
(5) 竜辰（りゅうたつ）

① 宝林寺の龍辰（4）

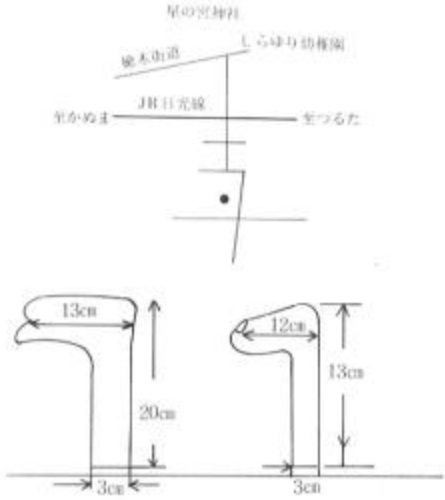
銘　安政二乙卯年上欠村宝林寺

竜辰は葬儀のとき、悪魔（悪鬼）払いのため、これを棒の先に付け、戸口に立てるものである。江戸時代後期（1855年）の作

② 東福寺の竜辰（大1、小4）



銘　下戸上村念仏講中（年代判読不能）



③ 福智院の竜辰（4）

銘　享保十六辛亥十月吉日
幕田村念仏講中

江戸時代中期（1731年）の作。享保の五十里洪水時の死者の霊を弔ったといわれている。

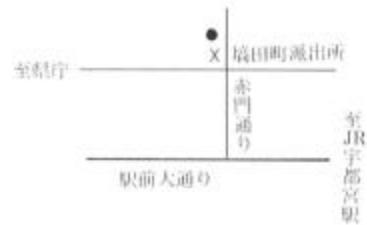
(6) 半鐘（はんしょう）

① 慈光寺の半鐘

銘

明治八乙亥年七月
宇都宮慈光寺什物
仁譽常海代
（他42名の陰刻）

総高60.5㎝、外径33.0㎝の青銅製、一部に凹傷があるがこれは宇都宮の空襲時にできたものである。1875年奉納



② 持宝院の半鐘

銘

宮鋳工
戸室将監作
多気山持室院現住
右為菩提
法印秀芹寄付
天明七未年
十一月九日
田下村
枝善六
木滑源左衛門

総高64㎝、外径36㎝の青銅製、江戸時代後期（1787年）に郷土の鋳物師戸室氏が製作したものである。本殿回廊軒下に下げられており管理よく優美な姿を保っている。

(7) 鳥　居

英巌寺跡の鳥居

銘　明治八亥九月

奉献

高さ約30㎝、幅約300㎝、柱の太さ（径）約33㎝で鋳鉄製。鋳物師太田利平の作とある。

鳥居左右の脚部には周施人としての17名の氏名がきざまれている。1875年に奉納されたもの。

(8) 供養塔

妙正寺の供養塔

妙正寺40代僧侶　日栄が宗祖入滅600回忌にあたり建立したもので、上部は青銅製で「南無妙法蓮華経」の題目をかかげ、最下部の台座の上に鉄製の供養塔が据えられている。正面の銘文は、「祖先がやっているように『南無妙法蓮華経』の供養をすることは、皆、佛になれるので見習いなさい。」という意味を示したものである。とのこと。

総高437㎝、石積上部幅150㎝、4段のそれぞれの高さは上部から順に205㎝、60㎝、90㎝、82㎝の四角柱である。

銘文（台座上部の裏面及び右側面の陽鋳）

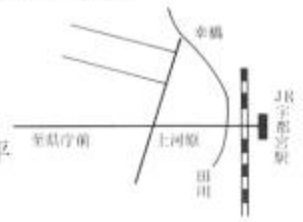
預修造立

妙正寺四十代

日栄發願主

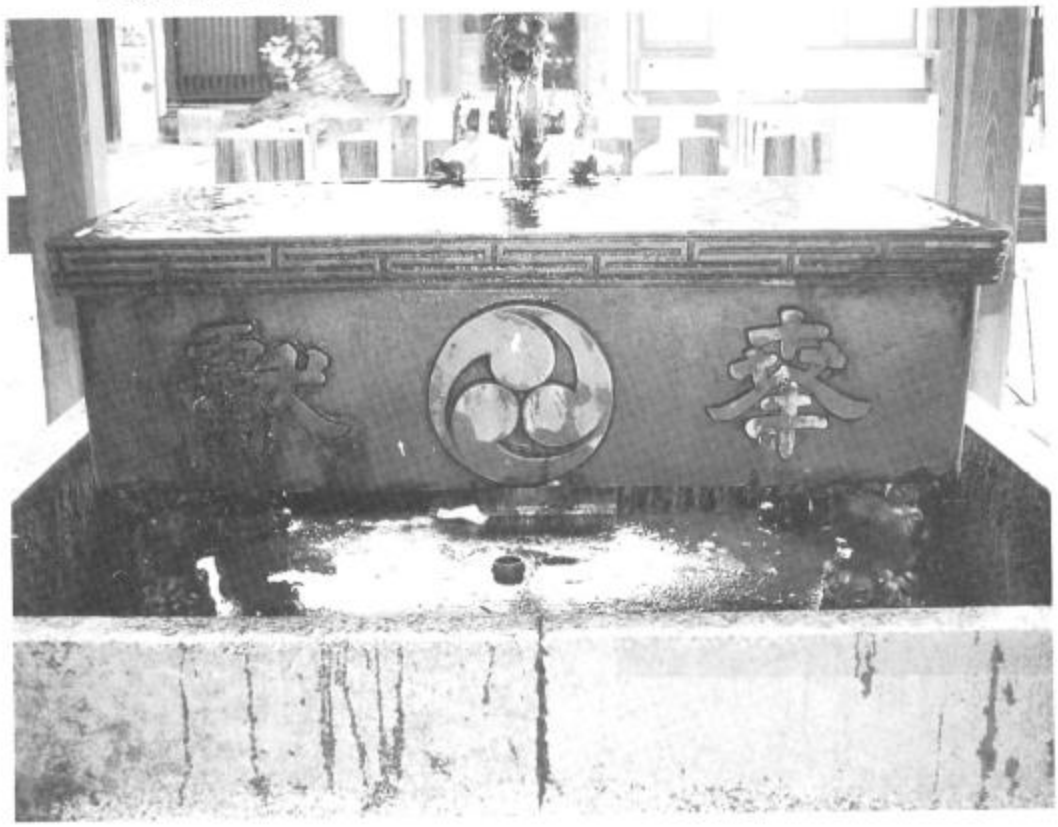
鋳物師　太田　利平

明治十年丁丑五月



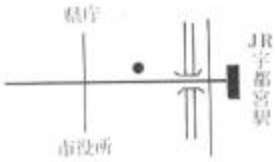
(9) 手水鉢（ちょうずばち）

二荒山神社の手水鉢



（東面）

献　奉



（南面）

此器天明年間枝
某之所寄納也尓
後再遣千災釁裂
不堪用乃仍舊貫
而稍加文飾改鋳
以安社前云
明治八年九月吉日
香園藤誠誌
元願主　枝源五郎
天明五巳年三月吉日

（西面）

祠宮
戸田香園
誌掌
中里千族
半田利七
周　三品新平
印南兵三
旋　松本茂平

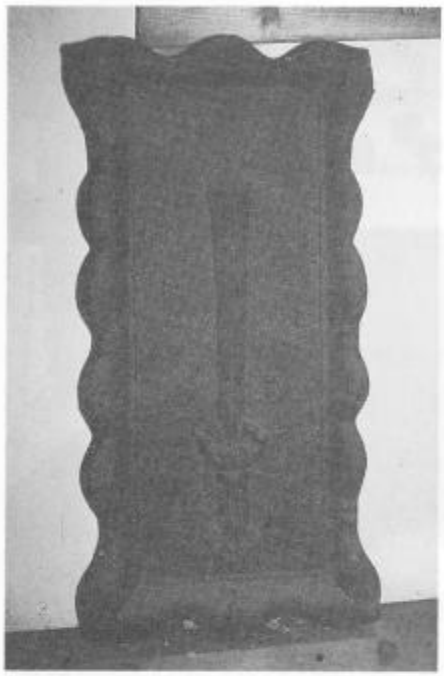
（北面）

築瀬久次郎
鋳物師
太田利平
明治八年丙九月

陽刻された銘文によれば、この手水鉢は江戸時代中後期（1785年）枝源五郎の寄進によったが、1875年に改鋳されているということである。総高90㎝、幅148㎝、奥行88㎝、脚高48㎝の鋳造物である。

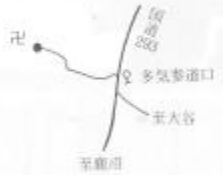
⑽ 絵馬（えま）

持宝院の宝剣絵馬



銘　栃木県鹿沼町願主
橋本友一郎
橋本　源次
橋本半次郎
栃木県鋳造所
大正甲子正謹製
芳田工業商會
□□　□□

この絵馬は全体が鋳鉄であり、宝剣の部分が鋳型で陽刻のように浮き出されている。本堂裏の壁面にかかげられている。縦85㎝、横41.5㎝、大正13年作。



⑾ 露盤宝珠（ろばんほうじゅ）

広琳寺の露盤宝珠

この露盤宝珠は広琳寺の文珠菩薩堂の屋根のもので伏鉢と露盤の間に空間を持たせ、そこに大日如来象を安置した珍しいものである。なおこの大日如来象は市指定文化財である。

「露盤宝珠」方形・六注・八注の屋根または塔の頂点に雨仕舞と装飾の目的でおかれたものが露盤であり、その上に宝珠をのせたものをいう。

(12) 天水槽（てんすいそう）

蒲生神社の天水槽（１対）

銘　奉　納
　　寄附者
　　宇都宮市旭町
　　谷村
　　鋳造所
　　所主　谷村亀吉
　　昭和五年八月

銘は陽刻、高さは台座部分を含めて133㎝、槽の部分91㎝槽の直径95.5㎝、厚さは6.3㎝、接地面の直径は約120㎝の鋳鉄製である。

(13) 金燈籠（かなどうろう）

蒲生神社の金燈籠（１対）

銘　創立三拾年記念
　　大工町二丁目納税組合
　　世話人
　　瀧沢　佐市（外５名氏名略）
　　昭和九年十月吉日
　　關根　榮吉（他12名氏名略）
　　鋳物師
　　宇都宮市石井街道
　　天明堂　□□
　　太田輝三之作
　　鋳工　高橋　興三
　　太田　芳一

銘は陽刻、高さ255㎝台座を含めて311㎝の１対の鉄製燈籠である。

6　消防関係半鐘

・半鐘所在地

凡例　文　学校　⛩　神社　卍　寺院　♀　バス停
〒㊥　郵便局　㊇　公民館　㊉　幼稚園

(1)　宇都宮市消防本部の半鐘（２口）

銘
佐野鋳造所製
㊇特製

総高 75 ㎝、外径 47 ㎝で本市の消防関係半鐘で最大級のものであろう。

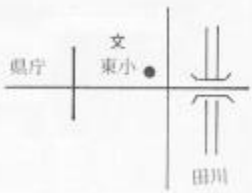
同じ大きさの青銅製が二口あるが一口は銘文がない。

解説によれば、大正 13 年県庁前に新設された常備消防隊詰所の火の見（望楼）に用いられた。火災の警戒や火災発生出動等いろいろの信号により消防隊員や市民に知らせたもので、昭和 53 年 4 月まで使われていたという。

(2)　東塙田の半鐘

Ⓐ

Ⓑ



Ⓐは乳が３段３列で「へ内図険險」の陽鋳ありⒷは乳が４段４列に並び、「㊇特製佐野鋳造所製作」の陽鋳がある。共に青銅製

(3) 竹林町の半鐘

望楼上にあり銀色に塗装されている。

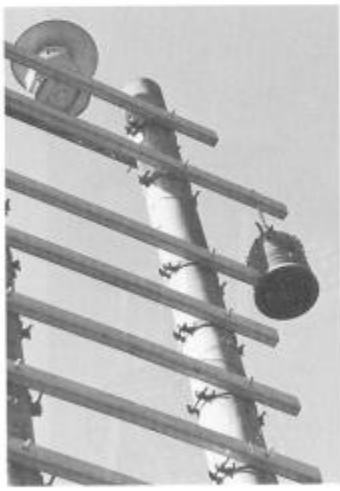
(4) 今泉新町の半鐘

火の見櫓上にあり、鉄製のものと思われる。

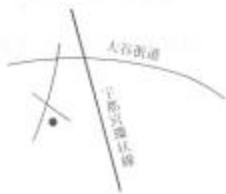
(5) 台新田１丁目の半鐘

台新田公民館内保管
銀色の塗装を施された
半鐘で、外径約35㎝、
高さ約51㎝、昭和７年～８年
ころ約52円で玉田ポンプ店
より購入（藤田榛氏の寄贈）とのこと。

(6) 駒生町西中丸の半鐘



火の見櫓上にある。
青銅製で損傷もないようであるが現在はサイレン使用



(7) 星が丘2丁目の半鐘（2口）

（写真はA）

室内保管、2口共に総高62㎝、外径30.5㎝Aの銘伊東　藤原信重作　宇都宮市。乳は4段4列である。Aは1986年（明治29年市制施行）以後のものと思われる。Bは無銘で乳は3段4列である。

(8) 石井町福島の半鐘

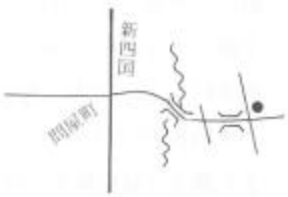
屋根付きの望楼上にあるが、屋根はかなりいたんでいる。青銅製サイレンと併設

(9) 石井町新谷の半鐘

屋根付きの望楼上にあり保管状況も良い。青銅製

(10) 石井町根本の半鐘

望楼上にあり。鉄製保管状況は良い。

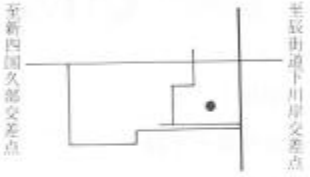


(11) 石井町下川岸の半鐘

望楼の中段にある青銅製

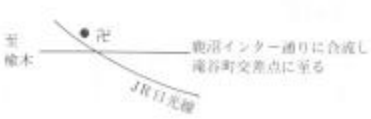
(12) 石井町西組の半鐘

銘 ㊆特製
望楼の中段上部にある青銅製の半鐘である。



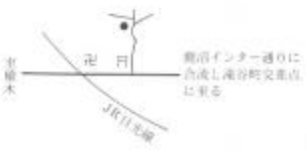
(13) 上欠町の半鐘

望楼上に設置された銀色塗装の半鐘である

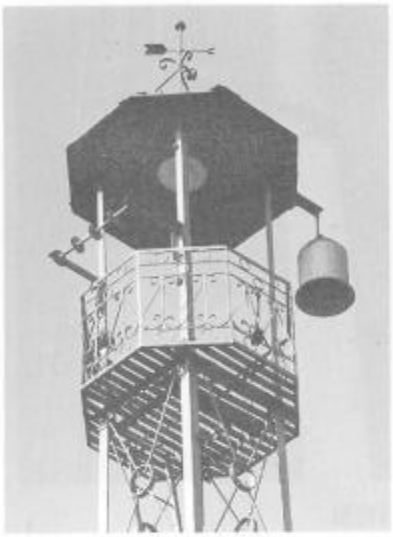


(14) 砥上町の半鐘

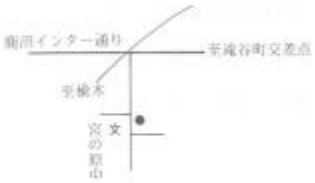
望楼上にある銀色塗装の半鐘である。



(15) 鶴田町下鶴田の半鐘



望楼上にある
銀色塗装の半鐘
である。



(16) 中央消防署東町分署の半鐘

銘　佐野尒　特製
青銅製
屋内保管
総高 72、外径 37 ㎝
乳は 4 段 4 列先ふく
らみである。撞座の
模様も鮮明な方である。

(17) 平出町鶉内の半鐘

材質　鉄
高さ 50 ㎝（吊り手を除く）
外径 37 ㎝
火の見櫓上に設置

(18) 平出町東組の半鐘

銘　東京㊇特製
青銅製
総高 45 ㎝、外径 30 ㎝
乳の頂点は先細型
屋内保管

(19) 平出町中平出の半鐘

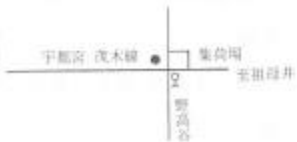
材質　鉄
総高　49 cm
外径　36 cm
模様、銘文なし
屋内保管

(20) 柳田町屋敷北の半鐘

望楼上にサイレンと併設青銅製、総高 58.5 cm、開口部外径 35 cm 装飾的な吊り手を持つ。重さ20 kg

(21) 野高谷町の半鐘

望楼中段にあり青銅製で第二次世界大戦前に購入したものであるとのこと



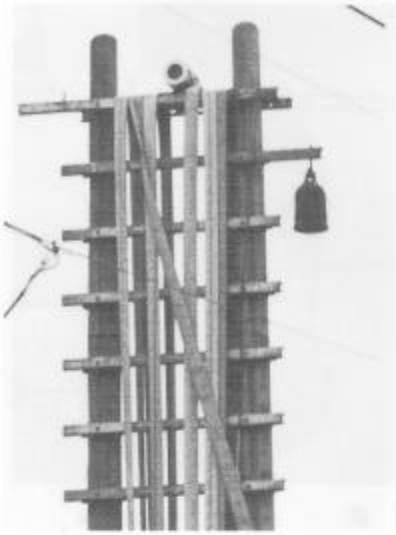
(22) 竹下町の半鐘

銘　佐野鋳造所製
㊅特製
屋内保管、青銅製
消防小屋改築に伴って現在団員宅で保管

㉓ 鎧山町の半鐘

望楼上にサイレンと併設。
青銅製
保管状況はよい。

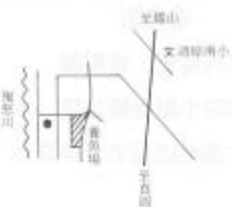
㉔ 氷室町の半鐘



火の見櫓上にサイレンと併設
青銅製。

㉕ 桑島町の半鐘

望楼中段上部にサイレンと併設されている。青銅製。

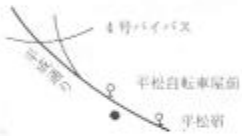


㉖ 満美穴町の半鐘

道場宿町で火の見櫓を改修し、サイレンにしたときに半鐘を満美穴町に譲ったとされている。
鋳鉄製。

(27) 平松本町の半鐘

望楼の中段上部に吊り下げられている青銅製の半鐘。



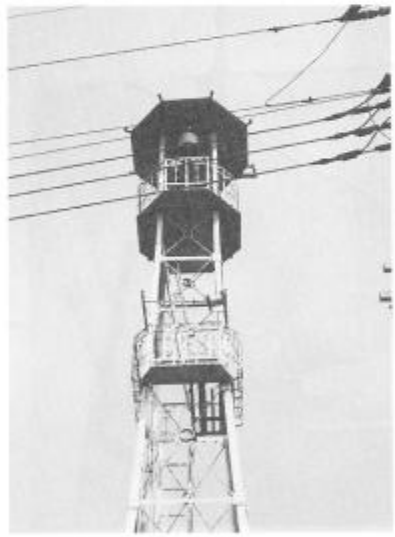
(28) 下栗町上坪の半鐘

火の見櫓中段上部に吊り下げられている鉄製の半鐘。

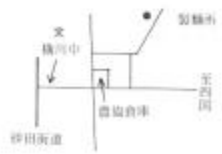
(29) 下栗２丁目の半鐘

屋内に保管されている鉄製の半鐘。

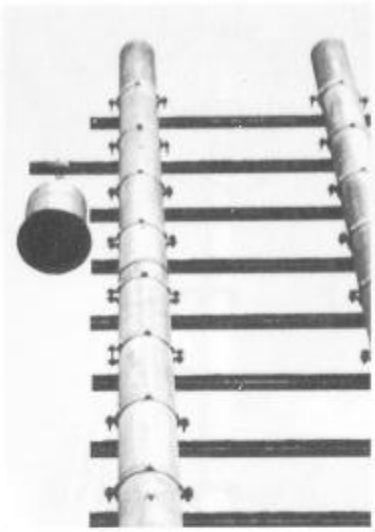
(30) 下栗町の半鐘



望楼に取り付けられている鉄製の半鐘。



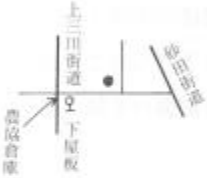
(31) さるやま町の半鐘



火の見櫓上部に取り付けらけた鉄製の半鐘。

(32) 屋板町下屋板の半鐘

望楼中段上部に吊り下げられている鉄製の半鐘。



(33) 砂田町の半鐘

屋内に保管されている青銅製の半鐘。

(34) 東横田町の半鐘

望楼上段に吊り下げられている。

青銅製。

(35) 下桑島町谷川の半鐘

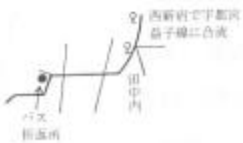
火の見櫓の中段に吊り下げられている半鐘。
銀色塗装。

(36) 西刑部町の半鐘

望楼上段にサイレンと併設されている。
銀色塗装の半鐘。

(37) 平塚町の半鐘

火の見櫓中段に下げられている青銅製の半鐘。



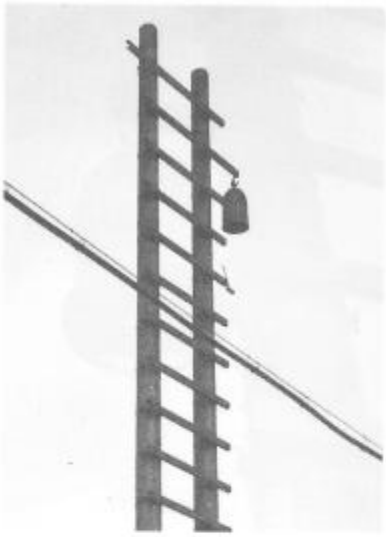
(38) 長岡町の半鐘

火の見櫓の上部にサイレンと併設されている鉄製の半鐘。

(39) 海道町の半鐘

望楼上部に設置されている鉄製の半鐘。

(40) 下川俣町の半鐘

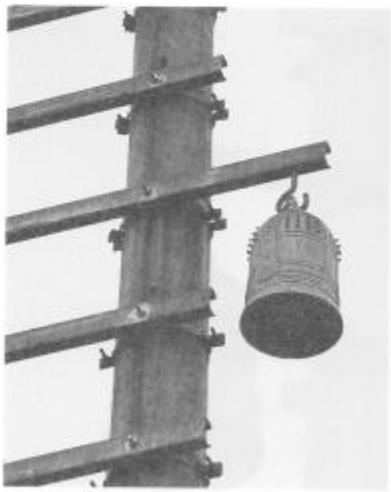


火の見櫓上部に下げられている青銅製の半鐘。

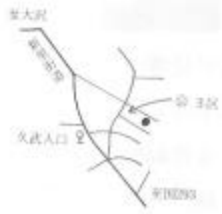
(41) 岩曽町の半鐘

望楼上部に下げられている青銅製の半鐘。

(42) 新里町上野の半鐘



火の見櫓中段に下げられている青銅製の半鐘　銘　佐野介特製　サイレン併設。



(43) 新里町西田中の半鐘

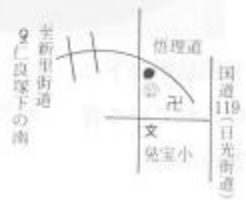
望楼最上部に取り付けられている青銅製の半鐘。
サイレンと併設されている。

(44) 宝木本町藤岡の半鐘

望楼上段に下げられている青銅製の半鐘。
銘　特製
　　昭和十年十二月十三日
　　国本村第5部

(45) 宝木本町悟理道の半鐘

望楼上段に下げられている青銅製の半鐘。

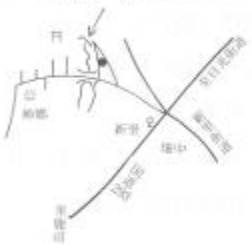


(46) 細谷町の半鐘

望楼の上段下部に下げられている青銅製の半鐘。

(47) 新里町山王の半鐘

望楼上段下部に下げられている鉄製半鐘。

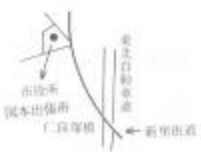


(48) 新里町西大堀の半鐘

銘　上
明治四十年五月
国本村第四部

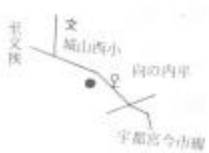
(49) 宝木本町仁良塚の半鐘

半鐘が下げられている望楼は宝木中央小校庭内にあり、その中段上部に設置されている青銅製の半鐘。



(50) 古賀志町向の内の半鐘

分団詰所軒下に下げられている青銅製の半鐘。



51) 田下町中の内の半鐘

総高 46 ㎝、開口部外径 28 ㎝

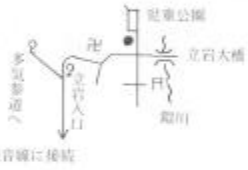
火の見櫓の上にサイレンと併設されている青銅製の半鐘。

銘　佐野尒特製

◉46 － 1595

52) 大谷町立岩の半鐘

望楼最上部に取り付けられている青銅製の半鐘。



53) 田野町の半鐘

火の見櫓上部に設置されている青銅製の半鐘。

54) 大谷町瓦作の半鐘

火の見櫓上部にサイレンと併設されている青銅製の半鐘。

55　駒生町湯殿神社東の半鐘

望楼上部にサイレンと併設されている青銅製の半鐘。

56　飯田町上飯田の半鐘

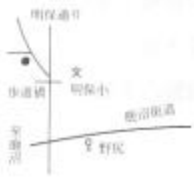
火の見櫓上にサイレンと併設されている青銅製の半鐘。

57　下荒針町羽下の半鐘

銘は陰刻で、本家先祖代々一切精霊に始まり、28戒名と没年がそれぞれ刻まれ（天明6～嘉永3）末尾に一家安全
子孫長久壹町月
高山五郎右衛門
嘉永三庚戌（1850）三月と記されている。
総高65㎝、外径36㎝の青銅製の半鐘。

58　下荒針町野尻の半鐘

望楼上部に取り付けられている鉄製の半鐘。



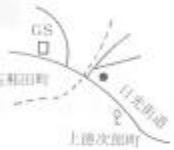
59 徳次郎町上町の半鐘

総高60 cm、外径34 cm

銘（陽鋳）㊎特製

佐　野

分団詰所内に保管されている青銅製の半鐘。



60 徳次郎町中町の半鐘

火の見櫓中段に下げられている青銅製の半鐘。

銘　㊎特製　佐野鋳造所

61 徳次郎町下町の半鐘

下町公民館に保管されている青銅製の半鐘。

総高54.5 cm、外径30.3 cm

銘（陰刻）昭和八年二月

栗野江

郷之堂

什物

62 下金井町の半鐘

下金井公民館に保管されている青銅製の半鐘

銘（陽鋳）佐野鋳造所製

㊎特製

内面に昭和三十五年四月下金井町の書付あり

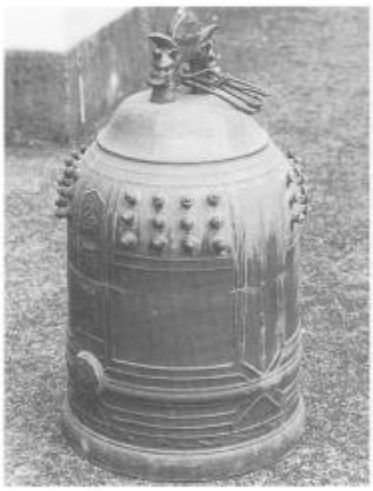
(63) 篠井町中篠井の半鐘

火の見櫓上部に下げられている青銅製の半鐘。

(64) 上小池町池田の半鐘

火の見櫓上部に下げられている青銅製の半鐘である。

(65) 篠井町土手内の半鐘



総高 45 cm、外径 27 cmの青銅製の半鐘。

銘　㊟特製

　△佐野鋳造所製

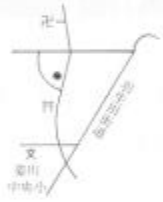
　屋内保管

(66) 飯山町の半鐘

火の見櫓上部に下げられている青銅製の半鐘。サイレンと併設されている。

㈥下砥上町の半鐘

望楼上にサイレンと併設されている銀色塗装の半鐘。



㈧ 西川田町北の半鐘

望楼最上部に下げられている銀色塗装の半鐘。

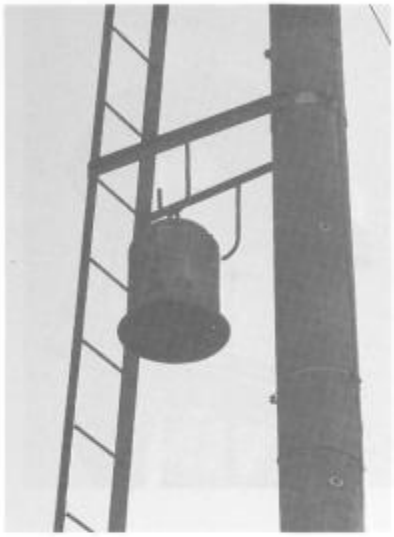
㈨ 下欠町北坪の半鐘

望楼最上部に下げられている銀色塗装の半鐘。

㈩ 幕田町の半鐘

望楼最上部に設置されている銀色塗装の半鐘。

(71) 西川田町南の半鐘



望楼上段に下げられている鉄製の半鐘。

(72) 鷲の谷町の半鐘

望楼上段に下げられている鉄製の半鐘。

(73) 東谷町の半鐘

半鐘専用の柱上に設置された青銅製の半鐘。

(74) 茂原町の半鐘

望楼に取り付けられている青銅製の半鐘。

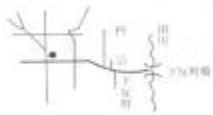
銘　昭和25年　茂原

075　兵庫塚町の半鐘

望楼最上部にサイレンと併設されている銀色塗装の半鐘である。

076　下反町町の半鐘

火の見櫓上段に下げられている青銅製の半鐘。
サイレンと併設



077　針ヶ谷町中坪の半鐘

火の見櫓の中断上部に下げられている鉄製の半鐘。

078　下横田町の半鐘

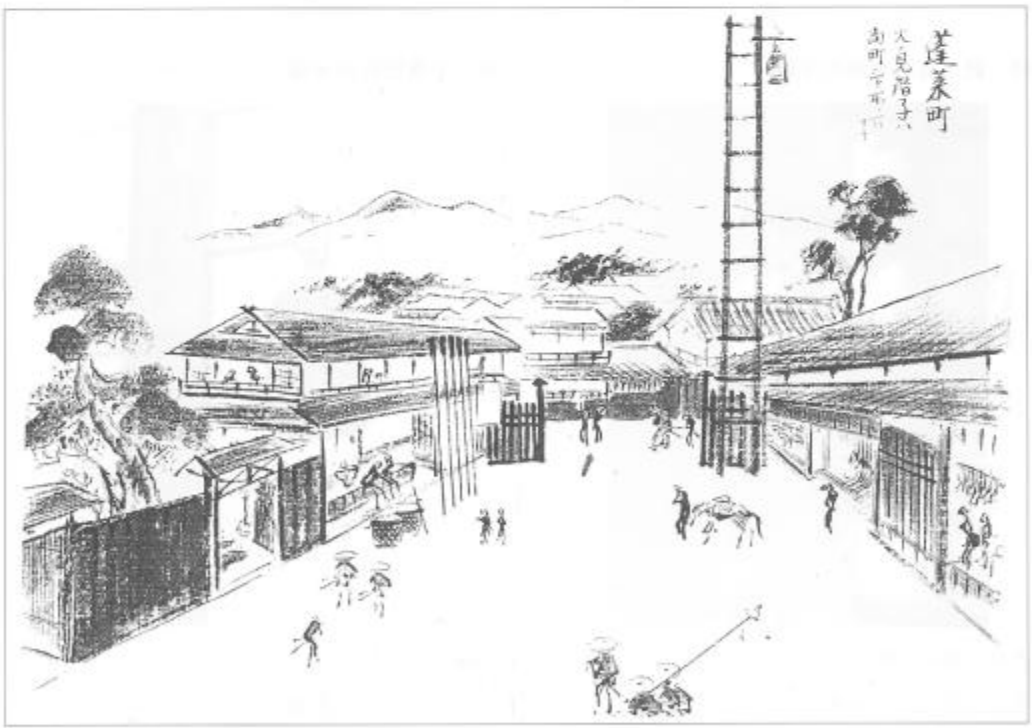
半鐘専用の柱上に下げられている青銅製の半鐘。
銘　東京㊦製

79　雀宮５丁目の半鐘

望楼上部に下げられている青銅製の半鐘。

80　羽牛田町の半鐘

火の見櫓上部に下げられている青銅製の半鐘。



火の見櫓のある風景　「宇陽略記」（文久４年）より〔蓬莱町・現西３丁目付近〕
宇都宮市大通り５－２－10　高橋節子氏所蔵

Ⅲ　参考資料

1　金属工芸品所在一覧

(1)　国指定重要文化財

No.	名　　称	所　　在　　地	管理者	指定年月日
(1)	鉄　　塔　　婆	大通り５丁目３－14清巌寺	樋口　良弘	明44・８・９

(2)　国認定重要美術品

No.	名　　称	所　　在　　地	管理者	指定年月日
(1)	三十八間星兜	馬場通り１丁目１－１二荒山神社	松本　盛邦	昭９・９・１
(2)	鉄製狛犬	馬場通り１丁目１－１二荒山神社	松本　盛邦	昭10・２・14

(3)　栃木県指定文化財

No.	名　　称	所　　在　　地	管理者	指定年月日
(1)	兜　銘　宗　久	東峰町3002	福嶋　静子	昭36・５・６
(2)	鉄錆地六十間筋兜	東峰町3002	福嶋　静子	昭54・２・２
(3)	銅　　鐘	大谷町1198	高橋　敬忠	昭63・４・３

(4)　宇都宮市指定文化財

No.	名　　称	所　　在　　地	管理者	指定年月日
(1)	銅造宝筐印塔	上桑島町1041金剛定寺	平沢　照晋	昭32・６・３
(2)	銅　　鐘	竹下町1107同慶寺	福田　玄英	昭33・７・21
(3)	二荒山神社本殿勾欄擬宝珠	馬場通り１丁目１－１二荒山神社	松本　盛邦	昭36・９・18
(4)	篠井神祠	篠井町826	阿久津美淳	昭42・３・25
(5)	銅鐘（およりの鐘）	大通り４丁目２－22宝蔵寺	黒崎　貞逸	昭59・３・21
(6)	銅　　鐘	塙田１丁目３－３慈光寺	吉田　真祥	昭63・３・22
(7)	銅　　鐘	大通り５丁目３－14清巌寺	樋口　良弘	昭63・３・22
(8)	銅　　灯　　籠	大谷町1198大谷寺	高橋　敬忠	昭63・３・22

(5)　未指定文化財

No.		名　　称	所　　在　　地	管理者	備　　考
(1)	①	宝蔵寺不動堂の鰐口	大通り４丁目２－12宝蔵寺	黒崎　貞逸	
	②	清巌寺呑龍堂の鰐口	大通り５丁目３－14清巌寺	樋口　良弘	
	③	善願寺観音堂の鰐口	南大通り１丁目８－19善願寺	加藤　康照	
	④	柳光寺の鰐口	柳田町354番地	柳田町自治会	柳光寺は現在公民館

No.		名称	所在地	管理者	備考
	⑤	毘沙門堂の鰐口	新里町864	新里3区自治会	
	⑥	大谷寺山門の鰐口	大谷町1198大谷寺	高橋　敬忠	
	⑦	大谷寺本堂の鰐口	〃	〃	
	⑧	大谷寺宝物館の鰐口	〃	〃	
	⑨	大谷寺阿弥陀堂の鰐口	〃	〃	
	⑩	持宝院の鰐口	田下町564持宝院	伊東　永峰	
	⑪	羽下薬師堂の鰐口	下荒針町2625羽下薬師堂	倉松　松良	（能満寺）
(1)	⑫	飯田町旭観音堂の鰐口	飯田町405番地　観音堂	飯田町農事組合	
	⑬	立岩地蔵尊堂の鰐口	大谷町374－2立岩地蔵尊堂	戸室　智之	
	⑭	大道寺観音堂の鰐口	大谷町317	柴田　ノブ	
	⑮	麦倉家薬師堂の鰐口	下荒針町3638	麦倉　武	
	⑯	徳次郎町薬師堂の鰐口	徳次郎町225		2個
	⑰	篠井神祠の鰐口	篠井町826	阿久津義淳	
	⑱	光音寺薬師堂の鰐口	西川田本町1－9－34光音寺	高田　貞員	
	⑲	高照院墓域の鰐口	下欠町623		
	⑳	幕田町薬師堂の鰐口	幕田町267	幕田南自治会	
	㉑	正光寺太子堂の鰐口	雀の宮町4丁目5－18	壬生の観音寺	
	㉒	金剛定寺の鰐口	上桑島町1041金剛定寺	平沢　照晋	
(2)	①	上籠谷町両宮神社の鈴	上籠谷町1538両宮神社	芝野　卓三	
	②	大綱町高龗神社の鈴	大綱町263高龗神社	外鯨　民夫	
	③	智賀都神社の鈴	徳次郎町2478智賀都神社	〃	
	④	徳次郎町神明宮の鈴	徳次郎町下田中神明宮	下田中自治会	
	⑤	石那田町高龗神社の鈴	石那田町1493高龗神社	和田　晃一	
(3)	①	宝蔵寺の宝剣	大通り4丁目2－12	黒崎　貞憲	
	②	持宝院参道脇の宝剣	田下町564多気山持宝院	伊東　永峰	
	③	〃　本殿前の宝剣	〃	〃	
	④	〃　地蔵尊堂脇の宝剣	〃	〃	
(4)	①	鶴田観音堂の鉦	鶴田町243能満寺第二別院	中村　昇	
	②	下小池町の鉦	下小池町981	阿久津　栄	
	③	宝林寺の鉦	上欠町708宝林寺	八重樫豪宥	
	④	東福寺の鉦	下砥上町866東福寺	高橋　道照	
	⑤	駒生町上駒生の鉦	駒生町2802－1	城山分団12部	
(5)	①	宝林寺の龍辰（4）	上欠町708宝林寺	八重樫豪宥	
	②	東福寺の竜辰(大1、小4)	下砥上町866東福寺	高橋　道照	

No.		名称	所在地	管理者	備考
(5)	③	福智院の龍辰（4）	幕田町1078幕田町公民館（福智院）		
(6)	①	慈光寺の半鐘	塙田1丁目3－3慈光寺	吉田　真祥	
	②	持宝院の半鐘	田下町564多気山持宝院	伊東　永峰	
(7)		英厳寺跡の鳥居	花房本町2英厳寺敷地内	宇都宮市	
(8)		妙正寺の供養塔	大通り5丁目3－8妙正寺	斎藤　龍遵	
(9)		二荒山神社の手水鉢	馬場通り1丁目1－1二荒山神社	松本　盛邦	
(10)		持宝院の宝剣絵馬	田下町564持宝院	伊東　永峰	
(11)		広琳寺の露盤宝珠	平出町1673広琳寺	松本　尊弘	
(12)		蒲生神社の天水槽（1対）	塙田5－1－19蒲生神社	葭田　孝	
(13)		〃　鉄燈籠（1対）	〃	〃	

(6) 消防関係半鐘

No.	名称	所在地	管轄・管理者	備考
(1)	消防本部の半鐘（2口）	大曽2丁目2－21消防本部	宇都宮市消防本部	
(2)	東塙田の半鐘（2口）	東塙田1丁目5－21	市消防団第5分団	
(3)	竹林町の半鐘	竹林町575	宇都宮市消防団豊郷分団第1部	
(4)	今泉新町の半鐘	今泉新町167	豊郷分団第10部	
(5)	台新田1丁目の半鐘	台新田1丁目1	横川分団第2部	
(6)	駒生町西中丸の半鐘	駒生町西中丸1004	城山分団第10部	
(7)	星が丘2丁目の半鐘（2口）	星が丘2丁目3	市消防団第1分団	
(8)	石井町福島の半鐘	石井町福島2491	平石分団第5部	
(9)	石井町新谷の半鐘	〃　新谷1367	〃　第6部	
(10)	石井町根本の半鐘	〃　根本	〃　第1部	
(11)	石井町下川岸の半鐘	〃　下川岸122	〃　第3部	
(12)	石井町西組の半鐘	〃　西組493	〃　第2部	
(13)	上欠町の半鐘	上欠町705	姿川分団第4部	
(14)	砥上町の半鐘	砥上町747	〃　第6部	
(15)	鶴田町の半鐘	鶴田町260	〃　第7部	（下鶴田）
(16)	中央消防署東町分署の半鐘	東町43－2東町分署	中央消防署東町分署	
(17)	平出町鵜内の半鐘	平出町鵜内2336－1	平石分団第12部	
(18)	平出町東組の半鐘	〃　東組288－2	〃　第11部	
(19)	平出町中平出の半鐘	〃　中平出778	〃　第10部	
(20)	柳田町屋敷北の半鐘	柳田町屋敷北355	平石分団第9部	
(21)	野高谷町の半鐘	野高谷町321	清原分団第4部	

(22)	竹下町の半鐘	竹下町986	〃　第1部	
(23)	鐘山町の半鐘	鐘山町1066	〃　第7部	
(24)	氷室町の半鐘	氷室町1712	〃　第5分団	
(25)	桑島町の半鐘	桑島町中411	〃　第9部	
(26)	満美穴町の半鐘	満美穴町109	〃　第2部	
(27)	平松本町の半鐘	平松本町71	横川分団第5部	
(28)	下栗町上坪の半鐘	下栗町1781	〃　第6部	
(29)	下栗2丁目の半鐘	〃　1097	〃　第7部	
(30)	下栗町の半鐘	〃　262	〃　第8部	
(31)	さるやま町の半鐘	さるやま町182	〃　第9部	
(32)	屋板町下屋板の半鐘	屋板町下屋板725	〃　第12部	
(33)	砂田町の半鐘	砂田町432	〃　第10部	
(34)	東横田町の半鐘	東横田町396	〃　第13部	
(35)	下桑島町谷川の半鐘	下桑島町488	瑞穂野分団第1部	
(36)	西刑部町の半鐘	西刑部町823	〃　第4部	
(37)	平塚町の半鐘	平塚町128	〃　第3部	
(38)	長岡町の半鐘	長岡町114	豊郷分団第8部	
(39)	海道町の半鐘	海道町552	〃　第9部	
(40)	下川俣町の半鐘	下川俣町882－1	〃　第2部	
(41)	岩曽町の半鐘	岩曽町451	〃　第6部	
(42)	新里町上野の半鐘	新里町丙上野566	国本分団第3部	
(43)	新里町西田中の半鐘	〃　甲西田中	〃　第1部	
(44)	宝木本町藤岡の半鐘	宝木本町藤岡2082	〃　第5部	
(45)	宝木本町悟理道の半鐘	宝木本町悟理道1295	〃　第8部	
(46)	細谷町の半鐘	細谷町333－1	市消防団第11部	
(47)	新里町山王の半鐘	新里町乙山王	国本分団第2部	
(48)	新里町西大堀の半鐘	〃　西大堀	〃　第4部	
(49)	宝木本町仁良塚の半鐘	宝木本町仁良塚2250	〃　第6部	
(50)	古賀志町の半鐘	古賀志町338	城山分団第4部	
(51)	田下町中の内の半鐘	田下町中の内	〃　第14部	
(52)	大谷町立岩の半鐘	大谷町立岩384	〃　第2部	
(53)	田野町の半鐘	田野町845	〃　第3部	
(54)	大谷町瓦作の半鐘	大谷町瓦作800－6	城山分団第16部	
(55)	駒生町湯殿神社東の半鐘	駒生町1785	〃　第7部	
(56)	飯田町上飯田の半鐘	飯田町上飯田1046	〃　第15部	

No.	名称	所在地	管轄・管理者	備考
57	下荒針町羽下の半鐘	下荒針羽下2250	〃 第9部	
58	下荒針町野尻の半鐘	〃 野尻3437	〃 第1部	
59	徳次郎町上町の半鐘	徳次郎町上町3084	富屋分団第4部	
60	徳次郎町中町の半鐘	〃 中町	〃 第1部	
61	徳次郎町下町の半鐘	〃 下町公民館	〃 第2部	
62	下金井町の半鐘	下金井町公民館	下金井町会	
63	篠井町中篠井の半鐘	篠井町中篠井	篠井分団第2部	
64	上小池町池田の半鐘	上小池町池田391	〃 第4部	
65	篠井町上手内の半鐘	篠井町上手内	〃 第1部	
66	飯山町の半鐘	飯山町	〃 第5部	
67	下砥上町の半鐘	下砥上町754	姿川分団第5部	
68	西川田町北の半鐘	西川田町1038	〃 第10部	
69	下欠町北坪の半鐘	下欠町北坪623	〃 第3部	
70	幕田町の半鐘	幕田町696	〃 第2部	
71	西川田町南の半鐘	西川田町9－33	〃 第1部	
72	鷺の谷町の半鐘	鷺の谷町237	〃 第8部	
73	東谷町の半鐘	東谷町新田	〃 第7部 東谷町新田自治会	
74	茂原町の半鐘	茂原町490	〃 第9部	
75	兵庫塚町の半鐘	兵庫塚町300－2	〃 第9部	
76	下反町町の半鐘	下反町町318－2	雀宮分団第4部	
77	針ヶ谷町中坪の半鐘	針ヶ谷町880	〃 第10部	
78	下横田町の半鐘	下横田町715	〃 第6部	
79	雀宮5丁目の半鐘	雀宮5丁目3－19	〃 第1部	
80	羽牛田町の半鐘	羽牛田町189－1	〃 第5部	

2　宇都宮藩御用鋳物師戸室氏について

江戸時代から、明治時代の初期にかけて、宇都宮城下を中心に活躍した鋳物師がいた。この鋳物師は戸室という姓であり、宇都宮藩の御用鋳物師として、鉄炮町の町の名前の由来にもなったように、大砲などの武器類を製作していた。そのかたわら、梵鐘や仏像などの製作も手がけて、多くの作品を残した。しかし第二次世界大戦時の金属供出のため、多くの作品が失われたのは誠に惜しむべきものである。今回の調査の中で戸室氏に関する文献や御指摘があったため、以下それらを記載してみたい。

(1)　『鋳物師戸室氏一門とその遺作について』　　冨　祐次

（昭和62年発行『行餘芸談』第4号より）

下野の鋳物師といえば、佐野天明に代表されるかのようであるが、近世特に十七世紀末から十八世紀にかけて活躍した鋳物師戸室氏一門が宇都宮にも存在したのである。

戸室氏一門の遺作は、氏家町光明寺にある県指定文化財「銅造不動明王坐像」や宇都宮市善願寺にある市指定文化財「銅造盧舎那仏坐像」（ともに露座仏）に代表される如く、宇都宮市内や近在には、かつて多数の作品が存在したことが推測されるが、江戸期における再三の大火、近くは第二次大戦の空襲、金属回収による供出などにより遺存するものは少ないが、幸いにして供出を免れた梵鐘が宇都宮市内の大谷寺（大谷町）、慈光寺（塙田一丁目）、清巌寺（大通り五丁目）に現存するので、以下これらについて、その概要を記してみたい。

◦大谷寺の梵鐘

総高　115.0cm　　口径　49.0cm

比較的小型の鐘であり、軽快な姿をしている。笠の盛りあがりは高く、胴は肩から駒の爪まで直線で張りがなく、時代の特徴を示している。しかし乳は四段四列で、駒の爪は張り出しも少なく、幅も狭いところに古様が見られる。池の間1～4の全区に銘文が陰刻されており、銘により元禄8年（1695）同寺住職応賢が戸室重郎兵衛尉藤原定国に制作させたものであり、これが宇都宮市内にある戸室鋳物師の作品としては最古の紀年銘を持つものであり、制作者は初代定国と思われる。

◦慈光寺の梵鐘

総高　140.0cm　　口径　59.5cm

大型の銅鐘であり、堂々とした風格を示している。鐘身には幾分張りが見られるが、肩より駒の爪までほぼ直線で成形されている。乳は各区に五段五列、縦帯上部にも各区に2個、計108個が鋳出されているところに江戸期の特徴がみられる。撞座は蓮華文であるが、その径は14.0cmと極めて大きくなっている。銘は1・2区に陰刻されており、銘文には同寺の縁起と併せて創建時の鐘が破損したため、宝永元年（1704）当寺第12世見誉雲外

の時、大工町の竹岸孫惣が先祖の菩提を弔うため、戸室十郎兵衛藤原貞国に依頼し、奉納したことが記されている。大谷寺の梵鐘より９年後に制作されたものである。

◦清巌寺の梵鐘

総高　134.0cm　　口径　59.0cm

重要文化財「鉄塔婆」の建つ覆屋のすぐ東にある鐘楼に懸垂されている。これも慈光寺の鐘についで大型に属するもので、姿は整美されており、若干下方が開いている。笠の盛り上がりは特に高く、乳は五段五列、縦帯上部に８個、計108個と慈光寺のものと同じく、下帯には全周にわたり唐草文が陽鋳されている。池の間には１区に梵字（キリーク）１字が陽鋳され、２～４区には小さな文字でびっしりと長文の銘が陰刻されている。この銘文によれば、万治３年（1660）に鋳造された鐘が、火災により破損したため寛延４年（1751）今小路町の小牧時敏が戸室将監藤原元蕃に制作させて納めたことがわかる。

寺の話によれば、この鐘は同寺が一時荒廃した時、すぐ裏の田川に投げ入れられていたものを引き揚げ、一時隣の妙正寺にあったが、銘文を調べたところ清巌寺の鐘と判り、寺に戻されたといわれている。また、この鐘は宇都宮でも特に姿も美しく、音色もよいことから今次大戦の供出から免れたとのことである。

◦鋳物師戸室氏一門について

戸室家は現在も子孫が連綿として続いており、当主弘氏は第14代として市内吉野２丁目に居住しているが、同家に伝わる家系略記や過去帳によれば、先祖は常陸国石下の豪族八田氏の家臣であったが、慶長２年（1597）八田氏没落後宇都宮に来て鋳物師となり、寛文４年（1664）に没している法名「本願道春居士」が初代定国を称したものと思われ、代々宇都宮藩御用鋳物師として兵器（大砲など）の製造にあたるかたわら鐘、燈籠等の仏具などを制作していたもので、当主の祖父竹次郎（明治34年没）まで鋳物師を業としていたが、時世の変遷とともに不振となったため廃業し、以後「鐘屋」と称し荒物屋となったが、現当主になってから室内装飾関係を扱う店となり、最近馬場通り１丁目

名　称	制作年代	作　者　銘	所有者	備　考
銅　鐘	元禄８年（1695）	戸室重郎兵衛尉藤原定国	宇都宮市 大谷寺	
〃	宝永元年（1704）	戸室十郎兵衛藤原貞国	〃 慈光寺	
〃	享保元年（1716）	戸室将監定国	〃 同慶寺	市指定 文化財
銅燈籠	〃	戸室将監藤原元蕃	〃 大谷寺	
銅造盧舎那仏坐像	享保20年（1735）	〃	〃 善願寺	市指定 文化財
銅像宝篋印塔	元文元年（1736）	戸室将監藤原元蕃作	〃 金剛定寺	〃
銅　鐘	寛延４年（1751）	〃	〃 清巌寺	
銅造不動明王坐像	宝暦２年（1752）	宇都宮鉄砲町 戸室卯兵衛　生年七十一才	氏家町 光明寺	県指定 文化財
銅像宝篋印塔	宝暦13年（1763）	戸室将監藤原元蕃作	宇都宮市 生福寺	九輪・屋根破損
銅　鐘	文政元年（1818）	戸室将監造之	上河内村 羽黒山神社	

鋳物師戸室氏一門の主なる作品

（旧鉄砲町）から吉野２丁目に転居されたところである。

かって、宇都宮には鋳物師が住む町として町名にまでなっていた。そのなかでも代表的鋳物師戸室氏一門をはじめ鋳物師がこの町から町名とともに姿を消してしまったことは、時代の推移とはいえ、一抹のさびしさを感ずるものである。

（栃木県文化財保護審議会委員・宇都宮市文化財保護審議委員会委員）

(2) 『金工品調査雑考』　渡辺　龍瑞

（昭和15年発行『下野史談』10巻２号より）

六　宇都宮鋳工戸室氏に就て

宇都宮住の鑄物師戸室氏の作品が那須地方に相當見られるので、久しい前から調べ度と思ってゐた。不圖も今夏、宇都宮清住町・寶勝寺鐘（寶永三年鑄、口径二尺六分、高三尺六寸余）手拓の折、見物の方から戸室氏の親族なる事其の戸室氏は鐵炮町屋號も鐘屋事戸室氏なる事、菩提所は寺町・生福寺で、其の墓地には御家藝の鑄物の墓碑ある事や其の盛難秘聞迄御聞きして、永らくの宿願成就の端緒を得、而も縁は恐ろしく生福寺字迄手拓する事となり、雨の中を手拓の上右墓碑に參拜、後又戸室氏往訪の機を得て、梵鐘の手引と歡び　－　二口共に戸室氏の作品であったこと勿論　－且つは其の縁を奇特と思った次第で、以下少しく戸室氏に就いての紹介兼筆者の備志として置き度と思ふ。

戸室氏は江戸初葉末より鑄物を業とし、先代の戸室竹次郎氏迄は繼續したのであって、其の系圖もあったと云ふが、火災其他の爲めに散秩し、現在に於ては上記の墓碑銘文や緒方に散在する作品により謂ぶるの他はない。

右墓碑は正徳二年五月十三日に戸室元蕃の建立で、（註參照のこと）其の墓碑銘によると來歴を説き。

吾祖石下稲葉者本出八田家臣也慶長二丁酉中八田氏没厥」臣悉落魄民間祖稲葉亦爲庶人矣祖父石下重定好事作大」冶氏以寛文中甲寅二月卒家君戸室定國續箕裘之業亦爲鑄」工元文戊午六月十日易簀予慷慨而建碑後觀此者欽祖先之」業則豈得隴而望蜀哉大祖距今大凡百六十年勤以示耳孫」

と五行に刻名がある。即ち其れによれば戸室氏鑄工としての先祖は石下重定で寛文中に卒したと云ふ。しかし現在の所は其の遺品に接し得ず残念である。其の業を嗣いだのは戸室十郎兵衛定國で元文三年六月十日に易簀してゐる。現在遺存する大体の作品は此の定國邊りからのもので、以後皆十郎兵衛と云ひ又重郎兵衛・將監等と稱し、諱の刻まれてゐるもの丶他は識別に困難な程である。其の後繼者は將監元蕃で又多くの作品を残している。今是等作品と、上記墓碑に追刻してある法名没年とを對照して便宜に備へたい。（姓省略ス）

	紀年	名	所在地と作品	法名没年月
	元禄　四	十郎兵衛貞國	氏家町光明寺梵鐘	
	〃　四	重郎兵衛定國	鹽原町妙雲寺半鐘	
	寶永　二	十郎兵衛	宇都宮浄鏡寺鐘	
	〃　三	重郎兵衛	宇都宮寶勝寺鐘	
	正徳　四	重郎兵衛	伊王野村稲澤双盤	
	〃	將監	野崎村高性寺双盤	
	享保　四	將監	伊王野村東岩崎地蔵堂双盤	道察妙元居士 享保十三、八、五
	元文　元	將監元蕃	瑞穂野村金剛定寺寶篋印塔	
	〃　三	將監元蕃	黒羽町田町地蔵尊	高山宗心居士 元文三、六、十
	寛保　元	將監	金田村妙徳寺半鐘	
	延享　三	將監元蕃	川西町常急寺地蔵尊	觸空浄光居士 寶暦六、五、廿八
	寶暦　八	將監	大田原不退寺半鐘	
	〃　九	將監	東那須野村藥王寺半鐘	
	〃　十三	將監元蕃	宇都宮生福寺寶篋印塔	能達成智居士 明和二、十二、二
	明和　五	將監	東那須野村金乘院鐘	圓智是白居士 安永四、十、八
	文化　五	十郎兵衛	佐久山町正浄寺半鐘	空觀光鑄居士 文政元、六、二
	弘化　四	將監	兩郷村龍念寺半鐘	鑄徹道燈居士 嘉永四、二、廿五

是等は其の一部分で、各地に多くの作品が残された事は戸室家蔵の請負帳を見ても解るのである。

此間神佛具に限らず其の作品は日常什器類から、宇都宮藩御用の大砲鑄造にも及び、「大筒鑄立方」御用と染めぬいた旗が残って居り、其の作品分布は下野の宇都宮を中心とする東半に及んでゐるのである。即ち下野の鑄工の縄張を想定すれば西は佐野天明鑄工の範圍、東は戸室氏の縄張となるのである。其他同家には請負帳、覺帳注文帳見積書等の文書が幾分残って居り、他日を期して其の分布と内容を更に委細調べてみたいと思う。斯く

て、此の歴史ある戸室氏の鋳物業も先代竹次郎氏を最後として轉業したのであるが、其の鋳仕舞は芳賀郡田野村山本の妙傳寺梵鐘にして、時は明治二十四年九月十九であった事を附記して筆を擱く。

（註）三角形二尺四寸の鋳銅で蓮台に乗り、更に自然石に載ってゐる。正徳二年元蕃の作並に建立で面兩親法名、右に上記の由緒文、背面に先祖代々三界万靈の文字其他を刻み、左には多數の法名没年を刻む。蓋し此の面並びに背面の一部は後世の追刻である。一度盗難に遇ひ古物商の店頭より取戻したと云ふ。珍碑

(3) **『天明鋳物資料集　天明鋳工作品各国別（乾坤）』**　社団法人　佐野青年会議所

（昭和53年発行）

例　言

一、本書は足利市丸山瓦全翁調査の「天明鋳工作品各国別（乾坤）」を昭和二十五年四月五日に鋳物師若林彦一郎氏が借用清書したものを原本にしたものである。若林彦一郎氏筆写のものを前沢が写真に転写しさらに原稿用紙に浄書した。第一校正の段階で前沢・沢田勝之と田村了一が原典と照合した。印刷・写真・佐野市資料編との関係は青年会議所文化問題委員会委員と協議配列等を決定した。

「下野に存す天明鋳工以外の鋳工作品」

下野宇都宮鋳工作品（以下戸室氏と関係ないものは省略した）

◦上都賀郡北犬飼村永林寺鐘　正徳二稔秋八月
　鋳物師宇都宮住　戸室将監藤原定国作

◦同郡南押原村　瑞雲寺鐘　延享第四龍集丁卯十一月廿日
　宇都宮　戸室将監藤原元蕃

◦同　加蘇村常真寺鐘　正徳五乙未歳十月二十日
　鋳物師宇都宮　戸室将監定国

◦同村　興源寺鐘　正徳六丙申孟夏吉日
　冶工宇都宮住　戸室将監藤原元蕃作

◦日光町　龍蔵寺鐘　宝永七庚寅三月朔日
　鋳物師宇都宮　戸室将監藤原定国

◦那須郡佐久山町正沢寺半鐘　文化五戊辰十一月
　戸室十郎兵衛作

◦同郡大輪龍念寺半鐘　弘化四丁未年正月元旦
　宇都宮　戸室将監作

◦同伊王野村字岩崎　享保四己亥天三月吉日
　うつのみや　戸室将監作

◦同郡東那須村金乗院鐘　明和五年戊子五月吉辰
　　宇都宮鋳物師　戸室将監
　　同江戸神田多川民部弟子武兵衛
◦同塩野崎薬王寺半鐘　宝暦九己卯三月大吉祥日
　　鋳師宇都宮　戸室将監作
◦同野崎村高性寺双盤　正徳四甲午歳八月廿四日
　　宇都宮冶工　戸室将監作
◦同川西町常念寺地蔵尊銅像　延享三丙寅年二月十有二日
　　鋳物師宇都宮住　戸室将監藤原玄蕃作
◦那須郡市野沢勧浄寺半鐘　寛保元龍次辛酉十月摩珂日
　　宇都宮　戸室将監
◦那須郡練貫　稲沢双盤　正徳四甲午天二月吉日
　　宇都宮　戸室重郎兵衛作
◦不退寺半鐘　宝暦八戊寅天三月吉辰
　　宇都宮住　戸室将監作
◦黒羽田町地蔵銅像　天文三戊午天文三月吉日
　　宇都宮住　戸室将監元蕃作
◦塩谷郡喜連川町鷲宿松岩寺鐘　明治廿三年四月
　　鋳造人宇都宮住　戸室将監玄蕃
◦那須郡野崎村法善寺鐘　宝暦十庚辰歳八月十三日
　　宇都宮　戸室将監作
◦宇都宮塙田　慈光寺鐘　宝永元甲申如意日
　　宇都宮鋳師　戸室十郎兵衛作藤原貞国
　　松本新助藤原吉国
◦河内郡絹島村下小倉清泉寺鐘　寛延二己巳天十月吉祥日
　　鋳師宇都宮　戸室将監藤原元蕃作
◦宇都宮清巌寺鐘　万治三年庚子応鐘廿日
　　鋳師　太田喜平治藤原忠清（旧銘）
　　同寛延四辛未年三月十五日鋳造の現存の鐘
　　鋳師当所　戸室将監藤原元蕃
◦宇都宮市桂林寺鐘　元禄十六癸未年四月七日
　　作者　戸室重郎兵衛定国
　　松本新助吉国
◦都賀郡押原村上石川恵林寺鐘　正徳二稔秋八月
　　鋳師宇都宮住　戸室将監定国　二尺〇八分

◦芳賀郡益子町観音寺鐘　元禄七歳次甲戌五月十二日

二尺乳八〇

冶工宇都宮　戸室十郎兵衛藤原定国

松本新助吉国

◦同郡清原村竹下同慶寺鐘　享保改元歳舎丙辰冬十月

二尺四寸

大冶工本州宇陽城下　戸室将監藤原定国

乳一〇八

（保留二十一年八月鐘供養）

◦河内郡城山村大谷寺鐘　元禄八己亥天三月吉日

鋳師宇都宮住　戸室重郎兵衛定吉

◦宇都宮市清住町宝勝寺鐘　宝永三丙戌稔孟春吉辰

戸室重郎兵衛定国

◦同宿郷町善願寺鐘　享保九辰歳五月吉日

鋳工宇都宮　戸室将監藤原元蕃

◦下都賀郡姿村下古山華蔵寺鐘　寛保壬戌天十一月

鋳師宇都宮　戸室将監作

◦同石橋町開運寺鐘　宝暦八龍集戊寅九月

冶工宇都宮住　戸室将監藤原元蕃作

◦宇都宮市河原町妙正寺鐘　宝暦三歳舎癸酉七月二十三日

松本新助吉国

冶工　戸室十郎兵衛藤原定国

銘文中此記方不明

再興之鋳師　戸室将監藤原玄蕃

◦同　杉原町浄鏡寺鐘　宝永弐乙酉季十月日

鋳物商　戸室十郎兵衛

松本新助

（寺より届出るは寛永二年とあれども宝永を見誤りしもの）

◦河内郡羽黒山之鐘（元禄十四辛巳歳九月吉祥日）

文政元戊寅年十月中再替

戸室将監造之

宇都宮博労町取次人鍋屋儀七とあり、肩書に佐野天明鋳師とあるも誤ならん

◦同郡本郷村東汗講願寺鐘

干時元禄十六癸未天三月吉祥日

同国宇都宮冶工　戸室十郎兵衛藤原定国

◦塩谷郡氏家町光明寺鐘　松本新助
元禄四辛未歳孟夏十六日
冶工宇都宮池上住　高山加兵衛藤原加和
同当所　山田孫兵衛藤吉照
同大町住　戸室十郎兵衛藤原定国
◦芳賀郡田野村妙伝寺鐘　明治廿四年十二月廿五日鋳造
宇都宮鉄砲町　戸室将監家十二代戸室竹次郎之作
◦同祖母井町崇真寺鐘　元禄十七歳次甲辛季春二十一日
冶工　山重定　二尺二寸　乳一〇八
宇都宮住　戸室藤原定
◦河内郡平石村広琳寺鐘　享保十年三月六日
鋳工宇都宮住人　戸室将監藤原元蕃
◦宇都宮観専寺鐘　延享四年十一月
宇都宮市　戸室将監藤原元蕃作
◦宇都宮小袋町宝蔵寺鐘　宝永七年春王三月
鋳師　戸室十郎兵衛
◦宇都宮市寿町延命院鐘　寛永五年龍集戊子
戸室重兵衛藤原貞国作
◦上都賀郡加蘇村興源寺鐘　正徳六丙申孟夏
冶工宇都宮住　戸室将監藤原元蕃作
◦芳賀郡須藤村長安寺半鐘　嘉永三年五月
宇都宮鉄砲町御用鋳物師　戸室将監
◦小山町現声寺鐘　元文五年十一月
鋳司宇都宮住　戸室将監藤原元蕃作
◦宇都宮郡加蘇村　正徳五年十月
鋳物師宇都宮　戸室将監藤原定国
◦下都賀郡富山村富田大中寺鐘　宝永七庚寅年五月朔日
鋳師宇都宮　戸室将監定国
◦河内郡石橋町開運寺鐘　宝永八龍集戊寅九月吉祥日
冶工宇都宮住　戸室将監藤原元蕃作
◦那須郡佐久山町正浄寺半鐘　文化五年十一月
戸室十郎兵衛
◦芳賀郡益子町字道祖土正宗寺鐘　享保九甲辰四月廿弐日
二尺　乳八八
冶工宇都宮住　戸室将監藤原元蕃

◦同郡田野村光明寺鐘　元禄十五年三月
戸室重郎兵衛定国
◦那須郡大田原城東小滝妙徳寺　寛保元年十月
戸室将監作
◦同大田原町洞泉院半鐘　弘化二年秋
戸室将監作
◦塩谷郡氏家町光明寺大日銅像　明和四年四月
宇都宮　戸室平蔵同儀兵衛
不動尊銅像　宝暦九年四月
宇都宮鉄砲町　戸室卯兵衛　生年七十一才
◦芳賀郡田野村山本光明寺鐘
豈元禄十五壬午天三月吉祥日
二尺三分　乳六四
戸室重郎兵ェ藤原定国作

(4) 北口英雄栃木県立美術館副館長からの資料提供

① 福島県棚倉町　地蔵菩薩半跏像
宝暦三年　鋳工　戸室将監　（現存せず）

② 西白河郡表郷村　常在寺　梵鐘
享保二年　戸室重郎兵衛
（往時火災に会い、鋳直したものがあったが、昭和十八年に供出）

③ 白河市関山　満願寺　宝篋印塔
延享三年　戸室将監藤原元蕃　（現存）
（銘文・延享三丙寅龍集
初夏大吉辰満願寺現住
法印　宥鏘
筆者
泰巖房
宥胤
宇都宮住
御鋳師
戸室将監藤原元蕃作）

④ 那須郡湯津上村　地蔵菩薩像
天保四年　戸室将監　（現存）
（狭原の延命地蔵といわれていた）

⑤　芳賀郡芳賀町西水沼　常珍寺　銅造地蔵菩薩半跏像
　　元禄九年　戸室将監藤原元蕃　（現存）
⑥　宇都宮市西刑部町　成願寺　梵鐘　（供出のため現存せず）
　　戸室十郎兵衛藤原貞国
⑦　宇都宮市駒生町　能満寺　梵鐘　（供出のため現存せず）
　　宝永六年　戸室十郎兵衛藤原貞国
⑧　芳賀郡芳賀町下延生　城興寺　銅造地蔵菩薩坐像
　　（町指定文化財）
⑨　鹿沼市　永林寺　梵鐘
　　正徳二年　戸室将監藤原定国　（供出のため現存せず）
⑩　鹿沼市　瑞光寺　梵鐘
　　延享四年　戸室将監藤原元蕃　（供出のため現存せず）
⑪　日光市　龍蔵寺　梵鐘
　　宝永七寅年三月一日　戸室将監藤原貞国　（供出のため現存せず）
⑫　鹿沼市　常真寺　梵鐘
　　戸室将監藤原定国　（供出のため現存せず）
⑬　市貝町　妙恵寺　鐃
　　天保十年　戸室将監　（現存）

あ と が き

文化財シリーズ第12号として「宇都宮の金属工芸」を、関係者の方々の御協力・御指導により刊行することができました。ここに厚く御礼申し上げます。

金属の工芸品は、石と並んで多く信仰の対象物に用いられてきました。木や紙などと比較して、"永遠性"を見出していたからなのでしょう。それだけ、地元で大切に守られてきた訳なのですが、第二次世界大戦中の金属供出という大きな苦難を経たものの、戦後もやや軽んじられた傾向の中で、盗難や放置といった更なる苦難の道をも歩むものも多くありました。しかし一つ一つの工芸品には、作った人、奉納した人、拝んだ人などなど、実に多くの人達とかかわり合った歴史も、間違いなく刻まれているのです。

さらに、江戸時代の初期から明治時代の初期にかけて、宇都宮には戸室氏という鋳物師が活躍しておりました。かつての鉄炮町の由来にもなった鋳物師であり、かつ佐野の天命鋳物師と張り合った程の腕前を有しておりました。しかし、この事をお知りの方は非常に少ないのではないかと思われます。栃木県、ひいては全国にも誇れる技術がかつて宇都宮に存在し、その作品が市内に残されていることを、宇都宮市民としてもっと多くの方々が知っても良いのではないでしょうか。このような願いから、参考資料として戸室氏に関する文献を載せてみました。

また、今回、報告書を書くにあたっては、戸室鋳物師を初めとして、多くの名もない鋳物師が作った金属工芸品と、それらを取り巻く多くの人々とのかかわりを背景に考えながら、これらの歴史の一端にでも触れて頂ければという願いを込めてまとめさせていただきました。今まで何気なく見ていたり、近くを通り過ぎていた金属工芸品に対して、その中から滲み出てくるような郷土の歴史や誇りを、少しでも感じとるような努力をして、自分の住んでいる土地に愛着の心を持って頂ければ、編集に携わった者として、これに優る喜びはございません。

今回の調査にあたっては、限られた時間の中で行われたものであるために、調査もれや、記載にあたって言い尽くせなかった所など、多々あるとは思いますが、今後も引き続いて調査を行うつもりでおりますので、関係各位の更なる御指導・御鞭撻を心からお願い申し上げます。

最後になりましたが、本書をまとめあげるにあたりまして、御世話になりました多くの方々に心から感謝申し上げます。

平成5年3月

編集責任者
宇都宮市教育委員会
文化課長　安　達　光　政

文化財保護シンボルマークについて

このマークは文化財愛護運動の一環として昭和41年5月に定められたもので、ひろげた両方の手のひらのパターンによって日本建築の重要な要素である斗栱のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより文化財という民族の遺産を過去・現在・未来へと永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

平成5年3月31日発行

宇都宮の金属工芸

発　行　　宇都宮市教育委員会

編　集　　宇都宮市教育委員会文化課

表紙題字　　桜井敬朔

印刷所　　㈱井上総合印刷

文化財愛護
シンボルマーク

文化財シリーズ第12号